

平成29年(西暦2017年)10月

瞑想録(その22)

滝沢 無縛(たきざわ むばく)

この一連の瞑想録の主題は、「素朴な疑問と意外な気づき」です。誰もが当たり前だと思っていることを懷疑しおよそ人が気付かないことに気づこうという、自己流哲学の瞑想集です。ちなみにこれは科学でも学問でもありません。強いて分類すれば随筆です。科学が万能だとも思っていませんし、科学でない最大のポイントはここにあまたの思い付きについて証明を一切していないことです。私は、世の中には実は現状よりもずっと面白くて自由な物があるはずで、現代人はまだ十分にその視野を広げていないと信じています。

なお内容は気づいた順に並んでいるので、一見ランダムで読みにくいかもしれません。またこの論集の一連は下記のサイトに全部収容してあります。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

<https://sites.google.com/site/mubaku133/>

さらにこの一連の論集は下記のブログの主要記事を集めたものです。

<http://blogs.yahoo.co.jp/oseh13>

2017. 08. 23

1、ヨガの時代

最近世界中にいろんなヨガ教室が乱立して、ヨガが流行っている。ヨガと言うと普通に思いつくのはハタ・ヨガつまり「体操のヨガ」であるが、ほかにもドヤーナ・ヨガ(瞑想のヨガ≡禅)やニヤーナ・ヨガ(知識、勉強)とか色々ある。

道は色々あるが目指すところは同一でそれは、「神との合一」あるいは「天の理との一致」である。もっと最近の言葉で言えば、「自己解放」とか「自己実現」とかだ。本当の自分を見出して、それを素直に開花させて覚醒に至るのである。科学の時代だからこそ重要な修行である。

ヨガの起源は古代インドのバラモン教で、聖典はヴェーダである。アーユルヴェーダとかが良く紹介されているが、ヴェーダ自身は薬草や健康に限らないすべての知恵を

瞑想録(その22)

記したものである。このバラモン教の直の後裔がインドのヒンズー教であり、スピノフしたのが世界宗教としての仏教である。

ところでヨガが自己実現全面を目指すのに対して、仏教は病老死苦の苦しみからの救いの面を強調している。その意味でヨガの方が仏教よりも普遍的なのであるが、世界宗教になったのは仏教の方であった。もっとも私は自己実現の方を目指しているので、仏教よりもヨガ派である。

さてここでヨガの方が普遍的なのに、なぜ世界宗教にならなかったのだろうか。第1にヨガの基になるヒンズー教は、あくまでもインド人の民族宗教である。その経典はヴェーダとともに、マハーバーラタとかラーマーヤナと言ったインド民族神話である。だからどうしてもそのままでは、インドから外に出にくい。

第2の理由としてヨガはともかくヒンズー教は、カースト制度と一体物である。この身分固定制度は、文明社会では受け入れられにくい。それにしても自己実現という普遍的な物と身分制度と言う非人間的な物が、なぜ抱き合わせになっているのだろうか。どうしても切り離せないものなのだろうか。切り離せればヨガこそが、世界「宗教」にふさわしいのではないか。

ヨガが目標としている健全な自己実現、これの基礎となるのは健康な心身である。そして健康な心身の具体的な目標は長寿なのであるが、この長寿をバラモン教では現世に留まらない輪廻転生と言う壮大な捉え方をする。「永遠の健康」なのだ。

そして輪廻を前提に永遠の健康の意味を深く考えると、結果として「より良い人生に転生する」ことがバラモン教の目的となる。つまり善根を積んで、次の人生は「ハエでなくより高貴な人になろう」と言うことだ。この「より高貴な人生」をさらに突き詰めると、「同じ人間と言っても実は高低がある」と言う結論になり、これが身分固定制度になっていく。

こうして、考えすぎなところもあるものの、自己実現と身分制度が一体物になってしまうのだ。加えて聖典も共有しているので、聖典にこだわる限り「良いところ取り」はできないことになる。ここに多神教の雄であるヒンズー教の、扱いが難しいところがある。

ところが最近はやりのヨガは、宗教と言うよりもむしろカルチャーだ。自己実現や心身の健康を目指す一方で、輪廻転生や身分制度とは距離を置いている。狭い意味での宗教ではないので、できる技だ。そして信じるという行為にも昔よりも軽いものが好ま

瞑想録(その22)

れる現代だ。この時代にあつてヨガは、ある意味で世界哲学あるいは世界共通文化として、宗教を超えたところで広まりつつある。

つまりバラモン教やヒンズー教は世界宗教にはなれなかったが、ヨガと言う形態で世界3大宗教をも超えた存在となつて、現代文明をけん引するに至つたのである。これは人類遺産の総体として見れば好ましいことだと言えるだろう。

ところでこのヨガが現れる以前に世界をけん引していた世界宗教、今度はこれに注目してみよう。仏教は今見たように「扱う真理が狭い」のに世界宗教になつたが、これはなぜだろう。第1に儀礼よりも教え自体の強調による、地域性の希薄化がある。仏教の本質は知恵そのものであつて、カースト制度を少なくとも強調していない。これが同時に、ご当地インドで忘れられた理由でもあるが。

それにしても世界宗教の第一条件である非局在性は獲得したものの、なぜアジア全域に広がつたのだろうか。日本や韓国がこれを受け入れたのは中国の進んだ文化を受け入れる一環であつて、流れの方向は順だから分かりやすい。だが4大文明発祥の地ですでに儒教や老荘思想や道教の神仙思想と言つた優れた宗教を有していた中国が、なぜ直接には文化の低い西域からやってきた仏教を受容したのだろうか。

この矛盾に注目すると、こういう流れの逆行があつたのは仏教に限らず、世界宗教の全てに見られることが分かる。大ローマ帝国は固有の多神教神話を捨ててまで、辺境から来たキリスト教を受け入れた。またイランや西域は世界最古の宗教と言われるゾロアスター教を捨てて、田舎から来たイスラム教を受け入れている。

もちろんすんなりと受け入れられたわけではないが、それでも最終的には受け入れられた。実際に世界3大宗教を見ると、それらに共通点がある。①しつこい伝道、②来世思想(天国あるいは次の生)、そして③利他と救済の精神の3つである。特にヨガと仏教を比べると、ヨガは自分の悟り、仏教は他人への思いやりと、強調の対象が異なっていてまるで逆である。

普通に考えると他人が得をするより自分が得をする方がうれしいから、利他よりも利己を望むと思ひそう。私自身もそう。でも世の人々は、特に慈愛あふれるようには見えないのに、なぜか利己よりも利他の方を選んだ。その結果としてこれら3大宗教があるわけだ。

瞑想録(その22)

これは思うに、現実世界を見渡すと不幸なことが多すぎて、「今の生で救われますよ」と言う説教は説得力を持たないせいではないかと思われる。ただ今流行りのヨガはこういう深刻な世界を土俵にしていけないので、今後の伸長に期待するところが大きい。

最後に断りたいのは、「オウム等の邪教がヨガ教室を隠れ蓑に伝道活動をしているから危ない」という指摘である。こう言う危険な奴らは合唱団だろうが敬老会だろうが、使えれば何でも隠れ蓑にするので、ヨガ教室だけが危険だというものではない。

2、時系列的グローカル

「グローカル」と言う単語がある。「グローバル」と「ローカル」の合成語で、「世界的視野に立って地元のために活躍する」と言った意味で使う。最近流行りの行動形態だ。広い視野に立ったうえで地に足をつけて地道に活動すると言った感じだろうか。

私はこれとほぼ同様のことを、空間軸ではなく時間軸の方向で実践しているつもりでいる。つまり現在を最大の満足に過ごしながらも、その志は自分以降の未来を見つめて瞑想するということだ。あまりに刹那的だとみみっちい欲求にあくせくするし、逆に余りに遠大過ぎると非現実にかき離れてしまう。そういう意味では精神的グローカルは最も現実的だと思う。

良く「学問は永遠的な価値を持つ」と言われる。絶対再現性が金科玉条だから当然にその真理は永遠だろうが、事物には流行りすたりや常識の進化があつて、その真理は永遠かもしれないがたいていどこか隅っこの墓場で永遠に保存されているだけだ。

実際10年以上経ってもまだ発行されている本とかまだ流行っている歌とか、極めて希だ。価値ある真実だけが取捨選択されて人々の記憶として引き継がれあとは忘れられるのは、人の発達史としてはむしろ健全で効率的だとすら思う。向こう100年で特に特に淘汰されるのは夏目や芥川に代表されるような戦前文学だと予想している。

さてこのような前置きの上に立って表明すると、「時系列的グローカル」とは私のこのブログの編集精神のことでもある。以前にも告白したようにこのブログは基本的に瞑想ブログであつて、その意味では科学の対極にあつてむしろ芸術に近い。キーとなるスローガンは「素朴な疑問と意外な気づき」だ。「科学技術には当たり前しかない」ことを思い出すと、この「とんでもない」と言う意味でも芸術の側である。

ただ芸術と言う分野は学問以上に、時代取捨選択的である。つまりそもそも一度でも選ばれるのが希であるうえに、その選ばれたものも大抵が作者の死とともに忘れられ

瞑想録(その22)

る。いくつかの文学新人賞受賞者についてその後を地元の図書館の在庫の著者献策で調べたところ、ほとんどの人が1件もヒットしなかった。つまり新人賞でも十分に立派だが、それでも専門に飯を食えるには程遠いのだ。

美術でも最近別用で25年前の美術雑誌のバックナンバーを取り寄せてみたが、その雑誌の記事寄稿者のほとんどがやはりすでに忘れられていた。もちろんそれとは逆に、ゴッホやグランマ・モーゼスのようにほとんど死後になってやっと評価される人も居る。池袋モンパルナスの売れない画家たちは、描いては燃やす日々の繰り返しだったという。この辺の現象は、情報価値と言う観点から非常に示唆的である。

これら歴史的諸事象や原理原則を総合的に見ると、特に芸術的分野で人生を追う人は、①今その時を充実して楽しく生きる、②しかしその成果は自分の寿命以後も思い出されるとの気概を持てる、この一見矛盾する2要素を併せ持つような層の厚い人格と成果が最高だと言うことになる。

そしてこの広くて深い心構えは、最近に取り上げた武士道の手本の「葉隠」でも主張されている。葉隠の「武士道とは死ぬことだが、生きるときは楽しく生きよう」とも通じているのだ。芸術と武士道の両者の基本的同一性、これは偉大である。「死も生の一項目としたうえでの全体として充実した生」、これが本当の捨て身である。そしてこの立場が最も充実した日々を送れる。

私の如きが哲学を語るのも甚だ僭越なのだが、私の人生の目標は世捨て人である。目下誰の忠告も必要としていないし他人への気遣いなど無駄の限りだから、「現在(の人々や組織)をまとめる」みたいな仕事で時間を捨てたくない。つまり位置的グローバルはしたくないし巻き込まれたくない。だが「私のたわごとの1つでも将来役に立ったらうれしい」という意味で、時系列的グローバルには生きているつもりである。

ちなみに世捨て人と言うと「一人山奥の洞穴に住んで風呂にすら入らず一人で尺八を吹いて暮らす」みたいなイメージだ。だがこれは本格的かもしれないがかえって手間がかかって、瞑想の効率が上がらない。私は都市近郊のそれなりに便利なところのアパートに住んで、それなりに経費は掛かるが妻子とともに目立たなくかつご近所様や儀礼ごとに巻き込まれずに、つまりもっとも平凡な人として世捨て人をやっている。

3、テーマパークの興亡

瞑想録(その22)

先日、新宿駅西口の高層ビル街を歩いていたら、「えさし藤原の郷」というテーマパークの宣伝パンフをもらった。「夏休みに家族でいらっしやい」と言うことだろうか。パラパラめくってみると、平安古式豊かで広そうなテーマパークである。

このテーマパークは初耳だったので、家に帰って早速ウィキペディア等で調べてみた。平成5年設立とあるので、もうかれこれ四半世紀も経っている。当初は大河ドラマの「炎(ほむら)立つ」のセットとして作ったものを、拡張しつつ有効利用しているらしい。経営主体は「江刺振興開発株式会社」とあるから、実質的に奥州市のお抱え施設であろう。

入園者数は毎年15万人程度で推移している。しかも驚いたことに設立の平成5年は、ポストバブルの経済低迷期の真最中だ。仮にそれ以前のバブルのころから計画していたとしても、良く開園の決断をしたものだ。見通しや目論見はあったのだろうか。

入場料は800円と安い、中でいろいろ楽しむにはそのたびに別途課金される方式のようである。そもそもセットならわざわざ岩手県に作る必要もなかっただろうし、時期からして東北大地震後の支援と言う位置づけでもない。なぜこのようなものを奥州市に残せる形で作ったのか、また独立採算出来て居るのか市の持ち出しなのかと言った機微なところは、一切公表されていない。

さて、シミュレーションをしてみた。もしここに東京から行くとなると、新幹線が水沢江刺まで片道1万3千円、さらに駅から施設までの送迎バスとか公共機関とかが事実上ないのでタクシーで行くとしたら片道3千円、施設の特徴からして家族向きであることや日帰りは非効率であることも考慮に入れると、親子3人1泊で20万円はかかるだろう。私はこれだけでもう萎えた。

こういうところはパック旅行があるだろうとさらに調べてみると、クラブツーリズムが商品を出している。平泉の世界遺産訪問も含めて1泊2日で5万円だった。まあ3人で行ってやはりアトラクションとか買い物をすれば20万円だろう。しかも切符の手配等の面倒がない代わりに、自由は効かない。いずれにしても20万円もあれば、ソウルか台湾に行けてしまうだろう。一体どういう人達が行くのだろうか。

テーマパークとは所詮はお遊びの施設だから、生活必需品ではなくて贅沢費になる。したがって当たりはずれとかはやりすたりとかリピーターの有無とか、特に経済状況の影響を受けやすいだろう。この手のテーマパークで有名なのは何と言ってもデズニ

瞑想録(その22)

ーランドとUSJだが、私はどちらも行ったことがない。まあ地元のコスモワールドとか八景島シーパラダイスくらいなら成り行きで行ったことはあるが、リピーターではない。

それでも私も若いころはまだ知恵がなかったと言うか、わざわざテーマパークまで家族で出かけたことがある。今でも思い出に残っているのは、柏崎トルコ文化村と新潟ロシア村だ。もう20年以上も前になるがこれらを2泊3日で一周した。新潟なので新幹線は行っているのだが、現地での足回りを考えて車で行った。

いずれもそれなりに楽しかったが、ちょっと何かをやったり買ったりするとドカッと取られて、これはやはり営利団体だと実感した。それに往復の車の運転は結構疲れた。と言う訳でもしこれらの施設が近隣にあればリピーターになったであろうが、私どもはこの1回で済まさせてもらった。

あとで知ったのだがこの2施設とオウムのサリンプラントで有名な九条一色村(当時)の「ガリバーランド」、これらの都合3施設は新潟中央銀行(当時)のオーナー会長が「趣味で」作ったものだという。いずれも辺鄙な場所に単立していて客足が伸びずに、数年で閉園している。今は廃墟になって「パワースポット」と呼ばれているようだ。

冒頭にも指摘したようにそもそも娯楽施設だから、浮沈も激しい。有名なところでは宮崎シーガイアが数年前に閉鎖した。長崎ハウステンボスも一時は倒産かと言われ、旅行会社の売り子ですら「あそこは辞めなさい」と言っていた位なのに、なぜか奇跡的にV字回復した。いずれにしても土地等と同じく、きわめてやくざな水ものだ。

私はそもそもロシアとかトルコとか「学習もの」が好きなことから、だったら「藤原の郷」も好きになるはずだ。だが世の中の色々を見てしまうとテーマパークの表面的な面白さよりも、衣の下に鎧がちらつくような金取り主義の方にどうしても目が行ってしまう。知り合いの外人も「日本人はなぜ大自然でなく人工施設にばかり行きたがるのか」と、不思議がっていた。

先日地方創成の不思議について記したが、この江刺の施設は地方創成に役立っているのだろうか。地域を宣伝するという意味と雇用創成と言う意味では役立っているだろうが、工事をしたのはもしかしたら中央のゼネコンかもしれない。それに加えてもし赤字だったら目も当てられない。ここも10年後にはパワースポットになっていなければ良いが。

4、好きだけれどやらない

好きなことをやって嫌いなことはやらない、特別に強制とか金銭収益とかがなければ普通はこうだ。ところが私には、好きだけれどもやらないことが少なくとも3つある。

その第1は居酒屋巡りだ。私は居酒屋の庶民的で自由な感じが好きだ。高視聴率の「吉田類の酒場放浪記」も結構見ている。中には「しょうべん横丁」みたいな戦後の闇市そのままの所や、名物女将が歓迎してくれるところとか色々ある。単に酒類や多様な肴のみならず、店の作りとかたたずまいとか何気感じられる歴史とか、一々味わいがあって好きである。

その意味ではチェーンの居酒屋よりも、単立の方が圧倒的に好きだ。昼飯はチェーンのファミレスやファストフードでも構わないのだが、こと居酒屋は個性のないところはつまらない。そう感じる人は多いらしくてチェーン系のワタミとか金の蔵とか、今一流行っていないね。

まあそこまで蘊蓄のある居酒屋だが、私は実は居酒屋巡りをしたことがない。1番の理由は、人と群れるのが好きでないということか。居酒屋で一人飲みをしても格好がつかないし、かといって地元の常連と話をしてもどこか気を使ってしまう。私の他の記事を見ても分かるように、私は趣味が他の人とかなり違うので、話が合わないだろう。その最たる場合が、会社の先輩と一緒に言うケースだ。面倒過ぎて味も何も全く感じなくなってしまう。

もう1つの理由は、仮に居酒屋で気持ちよくなっても、家に帰るまでに多分に醒めてしまうと言うことだ。そう言うことで私は日々家で晩酌をしている。基本的に「風呂→晩酌→睡眠」が間断なく連続できるのが、きわめてありがたい。ちなみに晩酌は日々決まって1合半、その代わりに休肝日なしだ。

好きだけれど近寄らない2番目は、サブカルの人々だ。会社員とは正反対の、売れない絵描きとかホームレスとか一匹狼の職人とかそういった人々だ。戦前なら池袋モンパルナスに、今だったら高円寺とかジョージタウン(吉祥寺)とか下北沢とかにたむろして昼から酒を飲んでいるような、本当の自由人たちである。上戸彩が主演だった「下北サンデーズ」は、大ファンだった。

会社族は大嫌いでこういう自由人たちが好きなのだが、ことさらに友達になる気もないし現に居ない。その理由もはっきりしていて、この手の人々は現実には個性が強すぎてとても知り合いになれないのだ。結局どういうことかと言うと、自分自身が会社員

瞑想録(その22)

で毎日管理されているのが嫌なあまり、この手の自由人を理想化して憧れていると言うことではないか。

先日も高円寺の有名人で、無意味に都議選に出てでたらめな政見放送をし、政策会議と称して毎晩酒盛りをしていたというこのエリアでは結構知られた人のVTRを見た。下手な物語よりよっぽど面白くて笑い転げてすっきりしたものの、自分はとてついてもいけないとの感触も同時に持った。ちなみにこの人の選挙結果は大敗で、供託金の300万円も没収されたという。これだけの金があるのに飲まずに敢えて没収されると言う洒落は、偉大過ぎて私にはついていけない。

やってないことの3番目は、トラック(長距離ライナー)の運転手だ。あの巨大なトラックと自己同一視できて気が大きくなれる。それに時間内に所定の物品を搬送しさえすればあとは自分の天下だと言う管理のない自由が、何よりも魅力的だ。

そう言う自分が実際は何をやっているかと言うと、ちょっとした会社の研究開発職だ。研究職と言うと運ちゃんより聞こえが良いかもしれない。だが実際の業務は、すぐに儲けに繋がりそうなテーマを会社の方針に従って小手先で作るとか解析しているだけで、全くの現場労働者である。管理されているという意味ではむしろ奴隷に近い。居酒屋や自由人はともかく、運転手についてはもし人生がやり直せるなら、今度は選択を間違えない自信がある。

こうずらずら挙げてきたが、要するに私は自由が好きなのだ。もっと言えば自由が制限され管理されるのが、普通の人々の100倍も嫌いなのだ。実際に今の趣味と言えば瞑想だ。「証明しない科学」と言っても良い。おいしいところだけ頂いて、頭の体操をするのだ。ある人は、「昼間に釣りをして夜は釣った魚で一杯やって極楽の極み」だと言っているが、私も全く同じだ。

もうこれでこのまま人生を終えたいね。特に寝たきりはなく一発だ。

5、意思決定と検索アルゴリズム

人の日々は選択と決断の繰り返しである。昼飯時になれば、「今日はかつ丼にしようかチャーハンにしようかな」などと迷った末にどれかに決める。あるいは売り出し中の新築戸建て物件があればこれを買おうか買うまいか、立地条件や作りの良さや財布の現状などいろいろ検討したりする。

瞑想録(その22)

そして結論は「今日はかつ丼を食おう」だったり「この戸建ては割高だからやめよう」だとかになる。判断結果は端的に言えば「はい」か「いいえ」のいずれかであるから、0か1である。もし候補が10個あるならそれは選択肢について1位から10位まで順位をつけることであって、この意味で数字である。

もちろん「迷うことなくかつ丼が良い」場合と「悩ましいけどまあかつ丼にしておこうかな」と言う場合では1番と2番の意味づけが大きく違うのだが、選択結果だけ見れば結局は順位と言う数字である。この面からは選択とは①候補を挙げること、②それらの候補に順位をつけること、の2つの数値化行為の組み合わせと言ってよい。これを人の脳が時々刻々行っているのだ。

最近ニューラルネットワーク型の人工知能が進歩して、ディープラーニング(深層学習)技術が解析の主流となってきた。これで人の脳の働きを模擬しようという動きさえある。ただいくら人工知能技術が脳のシナプスとニューロンにヒントを得ているとはいえ、①インプットデータは一旦数値化しないとけなくて、②個々のパーセプトロン内で行われているのは四則演算である。人の脳があるいは足し算や引き算はやっているかもしれないが、意思決定の素過程で掛け算や割り算をしているとはおよそ思えない。

そこでむしろこちらの方が脳の素過程ではないかと思いつくのが、情報検索アルゴリズムである。情報には文字や画像あるいは音楽や味等種々あるが、ここでは単純に文字検索を念頭に置こう。例えば検索サイトで「情報技術」と入力してサーチボタンを押すとほぼ一瞬に一致度が高くて情報量の高い順に、該当サイトを羅列してくれる。あとは各個人がその必要性に応じて、良さそうなサイトをクリックすればよい。

この機械検索と言う行為もせんじ詰めれば、①一致あるいは類似の候補の抽出と、②それらの順位付けによる表示、の2行為から成っている。これは今述べた人の脳の選択行為と同じである。であるとするならば人の脳のモデルとしては、検索アルゴリズムの方が深層学習より近いのではないか。

検索サイトで著名なのはグーグルであるが、ここでのアルゴリズムは公表されていない。だが専門家の予想によると、200以上の項目があってそれぞれの項目で星取りをし、それら星取り結果の項目別の重要度による重しをつけた上で和を取って合計点とし、その点数の高い順から表示しているようである。

実際にはもっと複雑なノーハウがあって、単純な点数の合計ではないだろう。でもそれにしてもこの「超高次元重み付き星取りアルゴリズム」には、和と差はあっても積と商は介在しないという意味で、人の脳の働きにより近い。ここでこの多くの項目の「重さ」についてはさじ加減で決めるしかない」という点において、グーグルのアルゴリズムは仮に公開されても学問にはならない。この事実は、脳の働きはそもそも学問に収まらないことを意味するのではないか。

具体的な項目とそれらの位置づけ(重さ)については、下記のサイトに予測がまとめられている:

<https://moukegaku.com/google-ranking-algorithm/>

この中には形式的な要因(ホームページかツイッターか等)もあれば、内容に少しでも迫ろうと言う要因(更新頻度や書かれた日付等)もある。つまり種々雑多に網羅されているが、我々の脳が置かれた環境もやはり雑多なのであるから、学問には悪いが学問は永遠に現実に背を向けて生きる定めにあるのだ。

もちろん人の判断はかつ井にしても戸建てにしてもアナログで、つまり直感で決めている。だからグーグルの検索アルゴリズムも、「人工知能よりは人の脳に近い」と言うことであって、そのままモデルになるとまでは言えない。だが学問としてはつまらなくても、より現実的だとしたら十分にありがたいことである。

この検索モデルを基にさらに脳の本質に迫ろうとするならば、これはもう直感や知恵や感覚や気づきをそのまま表現できる「新たな数字」が必要であろう。だが残念なことに我々現人類はまだ、その新たな数字を見出していない。

なお最近グーグルにも、検索に人工知能を導入しようと言う方向があるようだ。そのための人事改革もあったという話である(下記のサイト)。ただし記事にはこの選択がリスクも含んでいることも、正直に記してある。また仮に人工知能の方が優秀な検索成績を収めたとしても、それが直ちに人の脳に近いことは意味しない。

<https://wired.jp/2016/03/13/ai-is-transforming-google-search/>

6、大塚家具で考えたこと

今は低迷に苦しんでいる大塚家具だが、久美子社長が刷新する前の大塚家具はいわゆる「寿ビジネス」だった。結婚や新築等の祝い事の際に財布が緩んでいる客を狙って、あたかも縁起物であるかのように高値で山売りするのがそのやり方だった。

瞑想録(その22)

私はあの販売員が看守のように監視してついて回るシステムが、あたかも自分が囚人にでもなったようで煩わしかった。2度と行かないぞと誓ったものだ。ところがあの販売員たち、聞くところによると家具と家については極めてよく勉強していたそう。家の平面図を見せただけでベストな家具のチョイスと並べをやってくれ、しかも顧客満足度も高かったという。

彼らの中には、年収が1千万円と言う人も居たそう。今時年収500万円でも十分上位なのに、所詮は店員を、誰がそんなに食わせているのかとも思う。まあそこまで知識とノーハウが詰まっているのなら、一応その辺の牛丼屋の店員と同列に扱ったらいかなんと言う気もしてくる。

しかしだ、ここで素朴な疑問が沸いてくる。その知識やノーハウって人類知として、本当に必要な知識や努力なのだろうか。例えば廃墟マニアは地の果ての廃墟の所在や行き方について、詳細な知識を持っている。だがこれらは明らかに、人類に最低必須の知識ではない。あくまでも余暇の楽しみとして、自分の小遣いをつぎ込んで楽しみでやっているから許される種類の知識だ。大塚家具の店員のノーハウは、こちらの廃墟マニアの側ではないか。

例えば市役所職員が市議会の運営方法について知っているとか、タイヤメーカーの研究員がゴムの基本的特性について知っているのは、然るべきだろう。スーパーに行ったら袋麺のうどんを買いたくても、どの店員もその置き場所を知らないようではあまりに不便だ。だからこれも、人類として最低必須の知識と言える。医者が自分の専門について治療法に詳しいのも、やはり必須知識だ。

だが家具チョイスのエキスパート、そんな人が必要なのだろうか。もう半世紀も前の、まだスーパーがなくて買い物と言えば商店街だったころを思い出してみよう。店主は一国一城の主で卑屈な店員ではなかったが、自分の店のどの品がどこまで売れたかまで細かく把握していた。そしてそろそろ古くなりそうな商品は、余り文句を言わないあるいは地元の顔役でない無難な客に押し売っていたりしていた。

要するに知識と能力を、商品価値に比して不釣り合いに過剰に使っていたのだ。そしてその集約商売の分だけ、無意味に割高だった。つまり気付かなかったものの客の立場にすれば、古い品を売られるために追い銭を払っていた形になっている。

瞑想録(その22)

こんな集約知識は人類総体としては不要である。その証拠に今商店街はどんどん寂れてなくなっている。そして時給千円のパートのおばさんによる大規模一括管理で、余剰品は捨てるだけのスーパーに取って代わられている。これがバランスの取れた知識配分だ。

大塚家具のかつてのエリート店員とは、このような化石店主がなぜか死に絶えずに生き残っていただけだ。これこそ時代錯誤の典型だと言えないだろうか。もちろん売りが宝石ほどに高価で貴重だと言うのなら、専門知識を持った売り子が依然として必要だろう。だけどたかが家具だよ。今だったら皇室御用達でない限り、ニトリやイケアで組み立て売りしている分野だ。

こんな分野にまで敢えて専門職を養成して「はい知識代でござい」って、正直言って狡くないだろうか。年収1千万円って富の公平分配の原則に反していて、非生産的にも程があるのではないだろうか。ここは久美子社長の言う「今はDIYの時代」が正しいと思う。

ロシアが共産主義を辞めて民主主義に移行した後でも、悪夢の共産主義を懐かしむ世代がかなり居たと言う。あたかもこれと同じように、「昔の大塚家具は親切で良かった」などと懐かしむ一団が今でも居ると言う。だったら答えるが、そう言う懐古趣味の人たちは自分たちでお金を出し合って、先に言及した廃屋マニアのように、家具マニアと言う趣味として内輪で勝手にやって下さい。

仮に販売員に1千万円も払いたいのなら、自分の財布からご自由にどうぞ。日本は共産主義国でないので、趣味の自由にまで制限は加えません。ただそういう人たちあるいは今まで大塚家具のお得意だったお人よしの人たちに聞きたい。額に汗を流して仕事をして毎日こき使われてそれで大塚家具と言う株式会社に貢いで、本当に悔しくないのだろうか。

今たまたま大塚家具は過渡期にあって売り上げが落ちているけれども、久美子社長がやったことはビジネスモデルの適正化を超えて社会正義であるとする。つまり従来の大塚家具の寿ビジネスは、時代遅れを乗り越えてほとんど詐欺ではないかと思うのだ。

ちょっと残念だったのは、久美子社長が「乗っ取る」のが早すぎたことだ。もう2、3年も待って1回会社をしっかりと潰して、「従来モデルではもうダメだ」ということが末端社員にまで浸透してからお出ましになるべきだったのだ。まあこの辺の見極めは確かに

難しいけどね。

7、し尿汲み取り業者より研究開発職の賃金が高い理由

経済自由の法則によると、物の値段は需要と供給のバランスによって決まる。だったら人が最も嫌がるゴミ収集業やし尿汲み取り業が最も高給であるはずなのに、なぜか企業の開発職の方が高給だ。これは単に「彼らがインテリで一流大卒だから」という理由だけでは、理解できない。

最近まで夏で暑かったが、そのある日私は、地元の図書館に行く予定があった。その時に借りていた本の返却期限が迫っていたし、次に予約した本も早く受け取らないと返されてしまう。図書館は私の家から徒歩圏にないので、家からバスで往復しかつバス停から陽の照る下を図書館まで10分以上歩くことになる。

そこで行き先が図書館だけではちょっと芸がないので、併せて適当なところで昼飯を食ってあるいは買って帰ることにした。昼飯としては4か所ほど当てがあるのだが、今回は暑い日だったので徒歩の途中にあるマクドナルドでバリューランチを食って帰る計画を立てた。

さて出かけようとする则嫁様が、「図書館の隣のスーパーに用があるので車に乗せて行ってやる」と言う。但し嫁さんの場合はその後さらに離れた所の別のスーパーでも買い物をする予定だ。それ全部に付き合うと結構時間がかかるので、とりあえず行きだけ乗せてもらおうと思った。

でもそこでふと閃いたのだが、その別のスーパーにはロッテリアが併設されている。だったらわざわざ暑い中を歩いてマクドナルドに行かなくても、嫁様が買い物をしている間にロッテリアで昼飯を食った方がよほど利口だと閃いた。直ちにパソコンを開けて割引券も打ち出すと言う応用動作もした。

さてそういう計画で実際に図書館に行って用を済ませて隣のスーパーに行ってみると嫁様は、「このスーパーで用が全部足りてしまった」と言う。私は「それだったら昼飯もここの弁当を買って帰るのが一番エレガントだ」と再び閃いて、即座に予定を変更して弁当を買い足した。

まあこの程度の臨機応変は、誰もが日々やっていることだろう。この程度の気づきがあったからと言って、「自分は頭が良い」などとは思わない。ただこの数日前まで私は、

瞑想録(その22)

夏バテと夏風邪のような症状で寝込んでいた。当然に頭も回らなかった。そしてその時の頭脳だったら、この程度の臨機応変すらできなかっただろう。

その意味ではこの程度の臨機応変でもサルよりは偉くて、まさに霊長類の長たるゆえんと言える。そこでこの出来事を奇貨として、臨機応変の気づきの推移過程を振り返ることにした。問題を整理すると、まず目的は「最小限の発汗で図書館と食い物屋を回ること」だ。つまりこの問題は比較的単純な巡回問題であると言える。

ここで図書館は主目的だから絶対に外せないが、食い物屋をどこにするかには余りこだわっていない。巡回途中に全く食い物屋がないならば敢えて遠回りをしないといけないが、あるなら行った先で併せて済ます方がよりエレガントだ。ここでエレガントと言う用語は、「数学として知能的だ」という意味である。

そしてちょっとした状況変化に対応した柔軟な対策変更、この行為の基本は新たに浮上した経路についてできるだけ即座に、①食い物屋を見出すと言ういわば「ヒントなしの閃き」と、②その閃きが正しいことの冷静な評価である。

そして体調が悪く頭が働かないときは、どう閃きが及ばないかを推定してみた。すると、①スーパーも含めた全経路についてイメージ(絵)ができない、②経路はイメージできても近所の食い物屋が閃かない、③食い物屋は思いついてもそれがベストの解かの確信がもてない、と色んな段階で頭が働かないことが分かった。

言い換えればこれらのハードルを難なくクリアすることが、だれもが日常やっている選択と決断の代表例なのである。ここに頭の働き方の秘密が隠されている。①理解する(回路程度にはほぼ絵を描ける)、②直ちに閃く(連想もしくは突発かつ独立に)、③比較評価できる(異質の選択肢について順位決定ができる)、の3段階だ。

そして閃きについて思うに、いずれの閃きも目的の「マクロの大目標」を意識しているから良いアイデアが浮かぶのであって、さもないと無意味な連想ばかりが広がって收拾がつかなくなる。これは例えば小説家が新作を描くときの手順にも似ていて、人の脳が人工知能小説のようにダッチロールしない根本の理由である。先ず全体構想を練るからだ。

まさにここが、自然知能と人工知能の最大の分かれ目ではないか。加えて人工知能では、「ルールのない突発的なひらめき」は出来ない。これらの人間固有の脳内活動、

瞑想録(その22)

これを鍛えるために教育は本来あるべきなのだ。私よりもっと頭の良い人や教育を受けた人は、さらに上回る解をもっと瞬時に出していたことであろう。

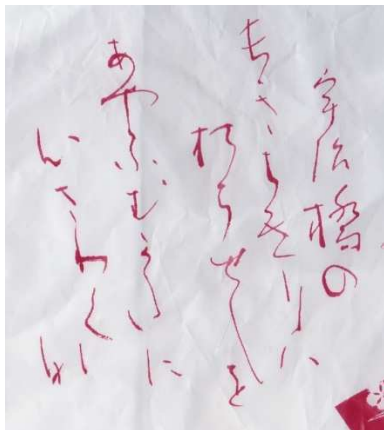
その意味では高校の数学で教える内容が別に微積分でなくても、数独でも碁や将棋でも良いのだ。要するに今までにない新規でかつ非日常的な状況に立っても、それなりに理解して閃いて評価できる能力の養成が目的だ。人は霊長類である代わりに、非日常的な仮想条件も絵にして解ける能力を要求されている。

例えば今まではブログを運営していた会社が今度はネット証券を運営することになっても、高々にわか勉強でその流れについて行ける。そういう種類の柔軟で理性的な脳を鍛え伸ばすのが教育の目的であり、さらにはSPI等の入社試験の目的なのだ。逆に見れば教育はそもそも人工的だから、つまらないのだ。

今たまたま微積分を教えているのは、それが併せて「工学部の授業の準備になる」と言う、目先の利便程度の優越に過ぎない。今私がやった経路探索程度なら本能に近いから、B級大学生もできるだろう。だがブログ運営からネット証券への柔軟な切り替えほどに人間の本来の自己防衛本能からかけ離れた行為になると、これはもう地たまと空想力の問題になってきてA級大学生ほどにインテリでないとできなくなる。

以上の準備でやっと、冒頭で設定した素朴な疑問の答えになる。世の中はこの「柔軟なインテリ性」と言う頭脳に対しても賃金を払うと言う構造になっているのだ。だから人が嫌がるゴミ収集やし尿汲み取り業者の賃金の方が、人気のあるアニメーターの給料より高いのは当然だ。でも大企業の研究開発職の方がもっと高給なのは結局、その生み出す経済効果の違いだと言うことになる。

8、浮舟(源氏物語第51畳)



瞑想録(その22)

先日にとあるきっかけで、1000年前に書かれた世界に誇る古典の源氏物語の、浮舟(うきふね)の畳を読みました。全部で54畳ある源氏物語の、最後の「宇治10畳」の中ほどになります。

その「きっかけ」とは、高級京菓子販売チェーンの「宇治式部卿」のビニール袋をたまたま見たところ、達筆の変体仮名で歌が詠まれていたことです(上の画像)。アナログと脳の視点から変体仮名には興味があったせいで多少は心得もあり、今回は私でも解読できました。

歌は次のように読みます:

宇治橋の 長きちぎりは 朽ちせじを あやぶむかたに 心さわぐな。

この歌の意味は、「宇治川にかかる宇治橋のように長い契りをしたが、これは決して朽ちはしない、色々怪しんで心を騒がせてはいけない」と言う感じです。宇治10畳の主演で光源氏の息子である薫の君が、宇治の田舎にひそかに囲っている浮舟(女性)に贈った歌です。

この歌が浮舟の畳(浮舟は女性の名前でありこの畳の名称でもある)の途中にあったので、これはちょうどよいきっかけだから浮舟の畳全部を読んでもよいと思ったわけです。現代語訳は下記のサイトを参考にしました:

<http://www.koten.biz/genji/genjimkaku/51ukihuna.htm>

さて源氏物語全体から見ますと、宇治10畳はそれ以前の畳よりも10年以上後のことを記事としています。このころには光源氏はもうなくなって、主演は①源氏の息子の薫(かおる)の君、②今上帝の息子の匂宮(におうのみや)、そして③彼らほどの身分はない浮舟の3名です。「宇治10畳別人著作説」もあるくらいで、間も開くし必ずしも有名ではありません。

それに宇治10畳全体がひとつながりの物語なので、浮舟の畳を読んだだけでは流れが今一理解できません。それでも浮舟だけで、字数にして約4万字あります。つまり源氏物語全体だと、単純計算で200万字になるわけです。これはとても簡単には読みこなせません。

と言う訳で源氏物語全体はおろか宇治10畳全部も読んでいない現状で、私に何かを語る資格もありません。ここは単に私個人の備忘録として、私が理解した範囲での浮舟周辺をまとめておきます。皆様に多少の参考になれば幸いです。

瞑想録(その22)

先ず光源氏は先帝(桐壺帝)の子息ですが、母の身分の問題で帝位には付きません。しかしその光輝くような容姿と才能によって、多くの浮名を流します。浮舟は光源氏の姪御に当たりますが、これも故あって常陸介の養女になったために、「女御更衣あまた侍ろう」中にあっては決して身分は高くないのです。

その浮舟が経緯により、まず薫の君に思われ人となります。そして当時は田舎であった宇治に、ひっそりと住まわされます。宇治は都から距離もあることから隠しどころではあったのですが、薫の訪問も頻繁ではありませんでした。主として手紙(歌)のやり取りによっています。

その浮舟をたまたま匂宮が目にする機会があつて、彼も一目ぼれをします。下男や女房に調べさせたところ宇治に居ることが分かり、匂宮はある日押しかけて強引に契りを結んでしまいます。浮舟も匂宮を快く思うようになりました。でも薫との縁が切れたわけではありません。ここで板挟みになり始めます。板挟みになるから文学です。

そんなタイミングに浮舟が薫からもらった歌が、冒頭で解説した歌です。ところが浮舟はもうやましいので、返って困ってしまいます。適当な歌を送り返してその場は取り繕いますが、心の動揺は隠せなくなります。この辺が宇治10畳の山場の一つです。この後に薫が浮舟を実際に訪れるのですが、悩む姿が返ってなまめかしくて、薫も浮舟をますます好きになります。

でもそういう理由で好きになられても、浮舟としてはますます板挟みになるばかりです。この辺のやり取りと心の襞の描写は秀逸の限りで、「さすがは天才の紫式部」と感嘆せずにはいられません。話の進行自体はかなりゆっくりで現代作品に慣れているとまどろっこしいところもあるのですが、この心の応酬こそが真の文学と言うものでしょう。

これ以降は続きの畳になります。浮舟は悩みぬいた結果誰にも迷惑をかけまいとして、入水して死のうとします。しかしそこを高僧に助けられて、その助言によって出家し、もはや俗世界との交わりを一切拒絶します。薫の君や匂宮の心残りの余韻をもって、この物語は終わります。

源氏物語には与謝野晶子、圓地文子、瀬戸内寂聴と言った名だたる文豪の現代語訳や要約本が存在しています。全体像を知るには要約本が良いのですが、源氏物語の妙味はあくまでも心の襞の描写にあるので、私としてはむしろどれか1, 2畳をしっかり読んだ方が、良さが伝わると感じます。こういう妙味は、数学等の理数系の学問

では決して到達できない境地です。

9、バックパック旅行

最近、日本を訪問する観光客が随分と増えている。1週間以内の短期観光で爆買いの人たちが多いが、中には日本が好きあるいはアジアや世界を回るのが好きで、何か月も長期滞在する外国人も結構多い。日本訪問の観光客に密着する愛国的な(?)番組も、高視聴率を取っている。

そしてこれら外国人ほどではないが、やはり時間をかけて日本一周、アジア周遊、世界旅行、あるいは特定のマニアックな国への半移住と言ったことを実行する日本人の若者も、増えてきている。しかしながら日本人は依然として少なめだ。これはおそらく、日本の終身雇用制度が障壁になっているのであろう。

日本では一度「出世ルート」を外れると、なかなか「正規ルート」に入れてもらえない。結局「生活や年金にも事欠く」ことになるという恐ろしい事実が、結果的に日本人の視野を狭くしてしまっている。そういう私自身も若いころは。こういうノマド的生活に憧れた。憧れたけれども結局行かなかった。

行かなかった理由を今振り返ると、分かる。私はノマド以上に、今やっている世捨て人的な瞑想生活をしたかったのだ。だがそれにもかかわらず私は彼ら世界のノマド達に、今でも親愛の情を持っている。特に物も持たず計画もなく貧乏なまま出たところ勝負で世界を回る、バックパッカーたちだ。

加えて最近では、田舎に自分で小屋を建てて貧しいながらも自由に生きる若者達も増えているという。私はもちろん彼らを応援する。だがそれでも気になるのはせこいことだが、彼らが旅費や生活費や健康保険料や年金をどう処理しているかという点だ。

昔からあるのは、行った先で短期の皿洗い等のバイトをやって稼ぎながら進んでいくパターンだ。最近はネットが発達して労働場所を選ばなくなったおかげで、「行った先でプログラムを書いてネットで送って出来高を振り込んでもらう」と言うパターンが増えているらしい。

でもいずれにしてもこういう貧乏旅行のバックパッカーの多くは、健康保険などには入っていないだろう。最近こういう人たちの医療費踏み倒しが問題になっている。これはバックパッカー達が最近特に保険に入らないと言うよりも、最近の医療の進歩に伴う

瞑想録(その22)

治療費高騰の故に踏み倒し額がべらぼうになったと言うことだろう。彼らの多くは、昔から保険なしだった。

さてこういう貧乏旅行の人たちは、野宿でなければホステルに泊まることが多い。ホステルはホテルと違って相部屋だが、その分安い。ただホステルに泊まる人を見てみるとその多くが単に安いからだけではなく、相部屋になった人々と知り合って情報交換をしたり友情をはぐくんだりしたいと言う理由もあるようだ。

先に触れた小屋で自活の若者たちも自給自足で手持ち金は少ないだろうに、ほぼ例外なく集まって夕食パーティなどをしている。人は本来、一人では寂しくて生きて居られなくなるものなのであろうか。私は今妻子と3人で暮らしているが、もともと人づきあいが苦手なのでこれで十分に満足で、これ以上友人を増やしたいとは思わない。

独身の頃は多少の友人付き合いもあったのだが、一般に頭の悪い人に限って一人前に自己主張や要求をする。話も家族のこととか飼い犬のこととかつまらないわりにプライドだけは変に高いので、もうこりごりだ。でも集まる人々を見ると、「私も嫁様に先に死なれるなどして一人になった時は居酒屋巡りで気を紛らわすのかな」と恐れる。

思い返すに若いころバックパックに出かけなかったもう一つの理由は、知らない他人と会話の話題を見つけるのが疲れて鬱陶しいからであった。まあテレビ等ではこういった交流を、多文化共生や異文化理解あるいは平和と隣人愛のひな型として美しく描いている。私もそれが常識だとは思う。

ただ白けるのを承知で言うが、こういった交通手段の発達による世界文化の混交の増大は、熱力学的にはエントロピーの増大を促進するもので、その究極な姿は「熱的死」だ。つまり世界中が温度差無く地域差なく一様化してしまう、どこに行っても同じのつまらない方向なのだ。

でもこう言うと、「ではなぜ地球の自然が長い時間経過で一様化していないのか」という、素朴な疑問が沸くだろう。これは太陽が系外から熱と光と言うエネルギーを放射してくれていて、これがエントロピーの減少作用つまり差別化をしてくれているからだ。加えて人と言う生き物はその知的活動によって、あくまでも局所的にはあるがエントロピーを減少させている。その結実が芸術品や学術成果だ。

だがここでまた不道德な事実を指摘すると、宗教で一番崇高だとされている利他精神がある。これはせっかく積んだ功德を他人に呉れてしまう行為であって、やはり平均化や熱的死の方向なのだ。もちろん人の世は物理学ほど単純ではないだろうが。

最後に文化混交の悪しき典型を1つ挙げる。その先駆け的兆候は、都会人の最近の自慢勝負の傾向だ。都会の人が変に外国かぶれして謙譲の心を忘れ、こちらが下手に出るとそこに返って強気で食い込んできて食い物にしまい、勝手に勝利宣言をし、さらに金品まで要求する。しかもこの慢心が、駆け引き上手であって美德であるとすらされている。

これはちょっと頂けない文化混交の始まりだ。

10、クールジャパンの使命

慶応義塾大学の広報誌「塾」の最新号(295号)の特集は、「クールジャパンのゆくえ」である。具体的にはアニメ、マンガ、ゲームと言った日本が得意とするサブカルコンテンツの現在から将来について、その現象学から政策論に至るまで、学術的に論じようという内容である。

このようなサブカルに関する前向きの注目は、10年ほど前に京都精華大学にマンガ学部が設置されて、有名漫画家の武宮恵子さんが学部長に就任した(現在は学長)のが1つの時代を画している。さらにやはり有名漫画家の萩尾望都さんも、現在女子美術大学の教授に就任している等がある。

だが超有名大学の慶応義塾大学でも特集を組むほどにこの分野が注目されてきたと言うことは、何事も後手の学界にあってはすばらしい決断だと思う。特集ではメディア論が専門の教授がコスプレをして、オタク文化について前向きの授業をしている様子などが報告されている。

このオタクと言う、どちらかというと「外れた」人たちがこそそと始めた分野も、今や学界ですら無視できない程の大きな流れに成長したと言うことだ。これはいつまで経っても夏目と芥川に拘泥する、進歩の嫌いな日本の学界を苦々しく思っていた私には、素直に朗報であった。

もちろん現行のサブカル文化の、個々の作品全部が後世に残るとは思っていない。と言うか作品として残るのはむしろほんの僅かであって、ほとんどはこの大きな潮流を

瞑想録(その22)

進めるための大玉送りの手のようなものであろう。球を一瞬送りさえすれば、あとは役割を終えて忘れられていく運命だ。私はそれで構わないと思っている。

さて以上に見たのは、現在まさに作り上げられつつある潮流である。だがこの対極には、長い時代を超えて生き残った古典がある。具体的には源氏物語や枕草子等である。これらが残った理由には、書写の部数の少ない時代に運よく廃棄されなかったという幸運もあるが、やはり重要なのはその作品の文学的価値であろう。1000年を超える時代を生き延びたのは驚異的である。

そしておおよそ江戸時代まで、物書きがまだ職業でなくまた大量印刷でなく筆写によっていた時代については、そもそもの作品数も少ないこともあって、ことさらに文学が専門でない人は各時代について数人の代表作を読めば済むほどに、すでに整理され潮流化されている。つまり①遠い昔と②極めて至近については、理解のされ方には違いがあるにしても視座はかなり整理されてきている。

整理されていないのは中途半端に古い、夏目や芥川を代表とする戦前文学の時代である。ちなみにこの「中間が最も猥雑」という状況は、なぜか物理学と並行である。結晶の世界には個体物性理論があり、非晶体の場合は統計学が使えるが、その中間のカオス的位置については決め手となる解析手法がない。

それにしても戦前文学もそろそろ個々の作品、と言っても主なものだけで1000個を優に超える作品があるだろうが、そして文学である以上はその持ち味は一つ異なっているのであろうが、そろそろ個々から大きな潮流へ整理されて、「ふつうの人が読むべき本は高々10作品」と言う作業がなされるべきだと考える。

樋口一葉も太宰治も宮沢賢治も波多野晶子も島崎藤村も幸田露伴もみんなまとめて偉いのだろうが、これではもう切りがない。そう言う言い方は専門家や暇な趣味人に任せて、もう大きな潮流として整理して欲しい。人の寿命は有限であるし、SNS等趣味や遊びの種類が爆発的に増える現代にあって、私を含めてふつうの人は戦前文学だけで一生を終わりたいくないのだ。

そして次の点を特に声を大にして言いたいのだが、その潮流整理に当たっては現在のアニメ、マンガ、ゲーム、コスプレ、ネットと言った現代的視点、これは毎年進化しているし進化した以上非可逆的であって後戻りはあり得ないのであるが、この現代的視点から必要と不要の仕分け、潮流としての評価をしてほしいのだ。

「夜明け前」は部落問題を扱ったという意味で当時は革新的だったかもしれないが、ネット時代から見ればもはやどうでも良いことだろう。また芥川作品も時代がそうであつたと言いつつも、変に西洋かぶれの二番煎じの所があつて、仮に彼が今芥川賞に応募しても候補にすらならないだろうと言われている。

万事このように大ナタでバツサリと切って欲しい。さらにちなみに私見を言えば、私は全くの素人だが江戸以前の文学作品の取捨選択は結果的に、意外と現代的センスに沿っているように思う。その証拠に良くアニメでキャラクターとして引用されているではないか。

11、ロシアの南下政策と満州

ロシアは有史以来ずっと、南下政策を続けた国である。特にトルコとは何度も交戦した、犬猿の仲だ。中央アジアではアストラハンを獲得したために、不凍港とは言われないがスイカを国内で供給できる。さらにかつてはチベットにまで密偵を送っていたと、川口慧海は報告している。

そこまで南下したいのなら最初から単純に、「もっと南に建国すれば済んだだけだ」と思うのは私だけであろうか。「北に作っておいて南に行きたい」と言うのは単純に余計な労務であり、全くエレガントでない。ただロシアは南下だけでなく東進もしているので、むしろ拡張政策と呼ぶべきかもしれない。

シベリアやアラスカまで獲得し、米国内部のアイダホ州にはモスクウと言う名の都市すらあるほどだ。日露戦争も満州とモスクワでは時差が4時間もあるのに、それでも獲得しようと画策した。ロシア人は勤勉でないが、良く指示命令系統が正常に作動したものである。当時の中国のような、軍閥や馬賊の勃興はなかった。

さてそのロシアだが、その歴史は意外と浅い。より先に建国されたのは今圧迫されているウクライナ(キエフ公国)の方で、これが10世紀ころだ。そしてモスクワ公国はその分国として11世紀ころの建国である。さらにロシアが公国から帝国になって中央集権化し国の体をなしたのは、イワン4世(雷帝)の時だ。雷帝は日本だと、織田信長と同世代になる。

さらに近代化を図ったピョートル1世(大帝)は、日本なら5代将軍の徳川綱吉と同世代である。彼の後ロシアは専ら領土拡張を続けて、モスクワ周辺からあつという間に

瞑想録(その22)

東進して、18世紀から19世紀初めには広大なシベリア全土を版図に編入した。但し産業革命には微妙に乗り遅れている。

ところでここで素朴な疑問が沸き起こる。18世紀ころにロシアが東進するまで、シベリアは漫然とではあるが中国(当時は清)の勢力範囲だった。ここで「漫然と」と言ったのはこのエリアは歴代、鮮卑とか匈奴と言った辺境民族の、国とまではいわなくても強大な勢力範囲であったからだ。

中国はその中華思想にもかかわらず、万里の長城を築かなければならないほどに北方遊牧民たちは強力で、中国を圧迫していた。それなのにロシア進出時にこれらの遊牧民族の抵抗は見えない。彼らは一体はどこに行ってしまったのだろう。さらに仮に消えたのは良いとしても、清がこの好機を生かして攻め込んで、このエリアの宗主権を主張するということもしていない。清はそもそも女真族であって、北満州は彼らの故郷ではないか。

それどころか北京条約で、沿海州をロシアに割譲させられてすらいる。これらの事実は素朴に不思議だろう。ところが歴史と言う学問はこの問いに答えないどころか、そもそもこういう素朴な疑問があることすら提唱していない。歴史学に限らず学問的手続きとは一般にこういうもので、事実を淡々と記載はするものの、その事実が核心をついているか否かについては全くの無頓着なのだ。

無頓着と言うかむしろ禁じ手にすらなっている。事象の真ん中に大穴が開いていることを公言するどころか、さも何もなかったかのように「平滑化」して記述している。だから知恵のある読み手は聡く、書いてない重要なところを掘り出す努力が必要だ。これができるかできないかが、地あたまの良さの尺度になる。

ところでそのシベリアや東北アジアには今でも、エベンキとかアイヌとかナナイとかケレイトとかブリヤート等の多くの中小諸民族が、土地を分け合いながら住んでいる。だが彼らは、ロシアと同じように寒くて住みにくい地に住みながら、ロシアと異なって南下したいとか膨張したいと言う気は全くない。むしろ父祖の地にじっと住み続けている。

だから冷静に観察すれば、ロシア民族の膨張要求の方がむしろ例外的なのだ。まあロシアはキリスト教なので神の命令に従って、「産んで増えて地に満ちた」ということで一応の理解はできる。エベンキ以下はアニミズムなので、与えられた自然に親しむのが本来だと言う訳だ。

でもこういう図式で考えると、やはりアニミズムで神道の国である日本が戦前に拡張政策を取ったことが、まさに例外中の例外に見えてくる。記紀神話によると日本の拡張政策の初めは、大和朝廷が天孫降臨の地である高千穂から外征を始めた神武天皇をもって鎬矢とする。だがそのきっかけや理由については、何も記されていない。

記紀神話がエベンキ以下の民族の神話よりも綿密かつ中央集権的に描かれてはいない。やはり基本的には歴史哲学者のトインビーが指摘したように、日本は四季自然が程よくて、①努力なしで飯が食えるほどでもなければ、②努力しても飯が食えないほどでもなかったと言うのが、当たっているのだろう。実際に勤勉で識字率も高かった。

日本の拡張、これは西欧のような「土人の植民地化」ではなくて、基本的に相互扶助的な八紘一宇と五族協和の立場だ。この辺はアニミズムらしい。この立場に立って日本の周辺地図を見ると、満州がちょうどあたかも日本に「もっていってください」と言わんばかりに日本本土と抱き合わせになっていて、しかも手空きになっているのだ。

日本の本土より寒冷だ等の条件の違いはあるものの、開国して「周辺意識」が解禁された後の日本には、満州があたかも「棚ぼた」のように見えたことだろう。もちろん満州開拓は軍部も絡んだ国策であり国がラッパを鳴らしたのではあるが、戦後生まれの私が素朴にこの地図を見ても、やはり満州は日本御用達の別天地のように見える。当時の日本人が感じたそのままに、私も感情移入できるのだ。

民族単位で見た時に、拡張する民族と留まり続ける民族、この選択肢の大きな違いのきっかけは何だろう。多分にちょっとしたことかもしれないが、結果はかなり違っている。但しどちらの選択がより幸せかは、これまた別の問題だ。

12、眞子さま婚約会見のほほえましい話ほか

今月3日に秋篠宮眞子さまの、婚約内定発表と記者会見がありました。最初は先月に予定されていたものの、水害等を慮って延ばした経緯があります。お相手は小室圭さん、パリパリの平民でもはや貴族や名家でないとダメなどと言う限定はありません。

この手の目出度い話題は、何と言ってもオバサンたちがこよなく好む所です。うちの嫁様も例外なく見て、祝福を申し上げておりました。記者会見自体は多分に常識をわきまえたものでした。でも解説記事等にはやはり尾ひれ背びれがついていたようです。うちでも更につきました。

瞑想録(その22)

嫁「会見のお言葉が流行語大賞かもですって」

私「あの『後ろの席で』というセリフかよ、流行るかもね」

(そんなわけないです。候補は小室さんの”let it be.”でした)

嫁「結婚しても共働きするそうよ」

私「旦那も働くのかよ？ それにしても宮内庁もそこまで庶民性をアピールする必要があるのかな？」

(眞子さまが東大の博物館の特別研究員を続けられると言うお話でした)

嫁「小室さんは法律事務所の正社員と言っていたわ、アルバイトじゃなかったのかしら」

私「それでは格好がつかないから急遽正社員にしたのだろう。事務所も街宣車に怒鳴られたくないのだよ」

(最近正社員になったのは事実のようです)

嫁「婿の小室さんは外野や宮内庁からいろいろ言われて、よく嫌にならないわね」

私「もう遅いよ、宮内庁マフィアに固められちゃって辞められないね、最初はもっと軽い気持ちだったのだろうけど」

(ちなみに私と小室さんと、最寄りの駅が同じでした)

嫁「眞子さまって旦那に尽くしそうな人柄が良さそうな人相よね」

私「私もそう読んだな、小室さんは目が高い」

(会見からは眞子さま主導で固めた婚約のように思えました)

お二人とも末永くお幸せに♡♡♡。

* * * * *

さて、若い2人の話はこれくらいにして、続いてやはり私と家族の最近の会話をいくつか。

私「クワクワ祭りって何？」

嫁「ワクワク祭りじゃないの？」

(嫁様の言う通りでしたが、「ワ」と「ク」がそもそも似ている上に、わざわざ似せたデザインのポスターでした)

瞑想録(その22)

嫁「隣の子供が『靴が変だ』と怒っていたから良く見たら、左右を逆に履いていたのよね」

私「だったらその子が気の済むまで、靴を殴れば良いだろう。」

(そういう問題ですよ)

娘がRPGゲームで「あと一步で上がりだ」と言ったすぐ後で急に怒りだした。

嫁「どうしたのでしょうか？」

私「最後の所でゲームにバックレラレタのだろう(笑)」

娘「もお〜〜〜〜！！！」(本気で怒って泣きながら行ってしまった)

(ゲームよりも私に頭に来ていたみたいです)

さて、さらに続けて最近のJK(女子高生)の笑えるお言葉をいくつか紹介します。出展は下記です:

<https://matome.naver.jp/odai/2135030038894266201>

JKA「au がイギリスを撤退するらしいよ、まずくない？」

JKB「ドコモとソフトバンクがあるから大丈夫じゃない」

(そもそも「イギリスがEUを脱退する」の聞き間違いですね。半分は合っているのが女子高生の無敵なところです)

JKA「うちの学校の三大七不思議知っている？」

JKB「えっ、21個もあるの！」

(とりあえず掛け算はできるみたいです)

JKA「成宮くん引退やって！」

JKB「やっぱり薬物していたのだ、カフェイン！」

(コカインでしょう)

(ちょっと古いネタ)アナン元国連事務総長の写真を見せて誰なのか聞くと、

JK(自信たっぷりに)「ボビーオゴロン！」

(ボブ・サップより少しマシか)

瞑想録(その22)

最後におまけを1つ。

ニュース「徳川、石田、小早川、宇喜田の子孫が集まって、関ヶ原以来400年の仲直りの握手をしました」

読者のコメント「全員偽物だろう」

(ハッピーな暇ネタに影武者は使わないでしょう)

それでは本日はこの辺で、皆さんお幸せに～。

13、上智な人たち

上智大学、結構レベルの高い私立大学だ。千代田区紀尾井町にキャンパスがあり、運営主体はカトリック系キリスト教のイエズス会である。イエズス会は「勉強によってキリストに近づこう」という趣旨の修道会で、世界各地に大学を有する。日本でも上智大学の他に、栄光学園、広島学院、六甲学院と言った進学校を傘下に有している。

そもそも会の趣旨が趣旨だけに教授クラスの神父が山ほど居るし、宗教系だから精神教育も重視する。それに必然的にリベラルアーツや外国語やグローバル教育に重点を置く。私立ならではの特徴を、最大限に発揮しているのだ。但し創立は100年ちよつと前と、開国と同時に開校したプロテスタント系の諸大学よりはやや遅れている。

そんな大学なので、日本のあらゆる分野に大勢の有名人を輩出している。本日はその中から独善と偏見でマニアックに、有名なOB等関係者を5人紹介する。

1、上坂すみれさん

若い人ならだれでも知っているが、本業は声優さんで今25歳。ロシア語学科卒でロシア語はペラペラ、発音も本物だ。声優として最も知られているのは戦車アニメの「ガールズ&パンツァー」で、ロシア代表でプラウダ高校生のノンナの役だろう。ロシア語が機関銃のようにガンガン出てくる。

この人は美人でもあるので活躍は声優に留まらず、ユーチューブでもいくつかの紹介動画が流れている。それを見ると分かるように、ロシア関係のみならずあらゆる分野に造詣が深い。そもそも凝るたちなのではあろうが、昭和のおもちゃからパンクロックからライフル銃の型式に至るまで、何でも知っている。

瞑想録(その22)

この辺の奥の深さが、いかにもレベルの高い上智大学と言う感じだ。かつては上智、青山、立教を合わせて「JALパック」などと言う言い方があったが、最近はこの中でも上智が一步抜きこんでいるように思う。そんな上智の若手のホープだ。

2、鎌田智子さん

外人客が多い「サクラホステル」の浅草店長を10年くらいやって、今は同じ系列の日暮里店の店長。ホステルと言うのは相部屋式の旅館で、いわば短期のシェアハウスみたいなものだ。別に就活に失敗したわけでもなく、最初から確信犯で新卒としてこの仕事に入った。

仕事のほとんどは常識が違って頓珍漢ばかりやっている外国人客に、日本の常識を教えることだ。トラブル解決まで引き受けることも多く国際色は高いが、好きでないとできない仕事だ。最近に「1万人の外国人客が止まる宿―体当たりおもてなし術」という題の本も出版している。さらに下記のアドレスで頻繁にツイッター発信もしている:

<https://twitter.com/sakurahostel>

要するにこの業界に入ってもう15年も経つのに、全く飽きていない。外国人が日本をいかに変に理解しているか、あるいは逆にホステルにブラッと来るような外人客にいかに計画性がないかが、上記の本やツイッターを読むと笑えるほどに良く分かる。そしてそんな仕事を楽しんでいる様子が伝わってくる。こういう「知的な行事」に長続きするのも、上智大学の一つのカラーではないか。

3、広瀬郁美さん

10年くらい前に「仏像ガール」の芸名で、日本の仏像を紹介して回ったお姉さん。仏教や仏像に関する本も出していて、しかも話に知性が感じられる。これらの態度から明らかに、「目立つために変わったことをやっている人」でない。今は本名で活動しているようだ。

この人が言うには「仏像が恋人」だそうだが、そのご結婚されたかどうかは知らない。この人でも分かるように上智大学は、キリスト教系の大学とはいいながら多様な人物を広く育成している。変に「生徒には信者が多い」などと言って回らないと気が済まないプロテスタント系の学院とは、タイプが異なる。

4、岩城光英さん

ずっと世代が遡って、そろそろ引退世代の人です。この人がいわき市の市長だったころに、新入社員だった私は先輩のカバン持ちで本人に会ったことがあります。この人

瞑想録(その22)

は苗字からも分かるように地元の殿様の家系で、彼の市長職もちょうど細川護熙さんが熊本県知事になったようなものでした。

この人はその後参議院議員になって法務大臣にも就任しました。でも先の総選挙で、現役の大臣であるにもかかわらず惜しくも落選してしまいました。法務大臣任期中には死刑執行もしており靖国参拝もしているので、この人もキリスト教徒ではないと思います。

5、リーゼンフーバー神父

最後は卒業生ではなくて神父様です。ドイツ出身で日本滞在暦50年、上智大学の名誉教授でもあります。実兄は元ドイツの大臣でしたが、その人が「私は頭が悪かったので人に仕えたが、弟は頭が良かったので神に仕えた」と言っています。

私はかつてカトリックの友人が上智大学構内のSJハウスで結婚式をしたときに、この神父が祝福をされた関係で会ったことがあります。そしてこの人が来た途端に、一陣の清涼な風が吹きました。こんな経験はそれまで、ヨガの大修行者でしかないと聞いていたので、「悟りを開くとはこのようなものか」と驚いたものです。

14、夢と解釈(その16)

<夢1>女の子がテストで、3つの整数の足し算を何題か、時間を決めてやらされている。私は指導者だ。その女の子は時間内に全部できて、ほぼ満点だった。その子が特にかわいいこともあって、「よく頑張ったね、あともう一息だ」とほめてやる。するともう一人別の指導者が居て同じ子に、「なんで1問でも間違えるのだ、このバカ」などと暴言指導をする。私は心の中で、「ブスな子だったらそれでも良いけど、こんなかわいい子に良くやるよ」と、冷ややかに見た。

<解釈1>「かわいい子にはえこひいき」、これは私の性格そのものです。

<夢2>私の母校が創立100年を迎えたので、記念の文集を作ろうと言うことになった。なぜか私が全生徒やOBの前に立って、呼びかけの演説をしている。趣旨を簡略に述べた後で「仔細については次の者の話に従うように」などと、さも偉そうだ。だが先生や聴衆の拍手をもって、私は堂々と演壇を降りた。空は真っ青な秋晴れであった。

<解釈2>私はこういう「人を統率する」とか「事業の世話を焼く」と言うのが、実は大の苦手で苦痛です。

瞑想録(その22)

＜夢3＞有名な先生を呼んできて、「専門から見た当業界の現状と今後の展望」という演題で、講演をしてもらった。会社の部長以下、多数の社員が出席して聴講した。無事に終わったので一息をつきに、近くの喫茶店に入ってヨーグルトセットを注文した。するとヨーグルト1つに1200円も取られた。

＜解釈3＞そもそもイベント屋と言うのが、私の苦手な商売です。でもバカ高いヨーグルトと言うのはいくら上司の指示とは言え、向いていないことを手掛けた罰ですかね。

＜夢4＞古くて大きな旅館に入り込んでいる。だが実はここが敵のアジトなのだ。我々は劣勢で次々に部屋を渡って逃げていくが、敵はどんどん蹴り破って迫ってくる。いよいよ追い詰められて絶体絶命だが、どうと言ったアイデアも浮かばないところで目が覚めた。

＜解釈4＞追い詰められて絶体絶命になるという夢は、なぜかよく見るのですよね。被害妄想かな。

＜夢5＞大学の依頼で講演に来ている。慣れた所でもあるし講演会場の1階が食堂なので、講演前にちよつとどんを食べに行った。ところが本日はもう売り切れたと言う。仕方ないので坂を下って、第二食堂の方に行った(キャンパスのイメージは多くの大学のそれがつなぎ合わさっていました)。すると確か生協の隣にあったはずの食堂がなくなっている。勘違いなのか引っ越したのか、まるで見当がつかない。

＜解釈5＞どうにもやりようがない夢も良く見ます。やはり被害妄想かな。

＜夢6＞「その男」である私は、暗い部屋で必死に何かを書いている。小さな文庫本の上に、印刷の有無に関係なくひたすら書き連ねている。例えばこうだ。「光、産褥熱、小刀→血」、「電気釜、斧、方位→DVD」、「吸血鬼、天球、羊小屋→終了」と言うようだ。そしてその時私にはすべてが分かった、この男は「逆辞書」を作っているのだ。最終的に、世の中のすべてを一つにまとめる「数式」を編み出そうとしている。そしてその連立方程式の解とは「皆殺し」だ。私は怖くなってその部屋を出たが、外はすべてカオス的暗闇だった。そしてその男はうずくまったままに、私を眼力のレーザーでいともたやすく八つ裂きにして薄笑いを浮かべた。

＜解釈6＞怖い夢ですが、一番危ないのは私自身かもしれません。

＜夢7＞有名な俳優(かつての鳩山来留夫のようだ)が、寸劇を演じていた。ところが局の効果担当が間違った音楽を流したために、劇がめちゃくちゃになってしまった。その俳優はがぜん、偉そうに怒りだした。まずその局の出身であるひな壇芸能者に、「お前は現役時代に一体どういう社員教育をしてきたのだ」とかみつく。さらに休む暇

瞑想録(その22)

もなく隣のおばさん女優に、「あなたからも注意してよ」などとせがむ。もう番組自体がめちゃくちゃだ。

＜解釈7＞弱気な私も一生に何度かは、心から吠えてみたい時があります。

＜夢8＞嫁様が何を考えたのか、突然に住み込みで現場作業員になった。当然に私も一緒に移り住んだわけだが、嫁様の手際があまりにも悪いので手伝っていた。そのうちに私の方が親方に見込まれて、ナツパ服まで支給してもらうことになった。小型の Yunbo を運転して地ならしなどする毎日になった。だがある日ふと、うちの組の工事には安全管理員が付いて居ないことに気付いた。この点を同僚に尋ねると、「うちの組は親方が毎日念力をかけているから大丈夫だ」と、口をそろえて讃美する。何か変な宗教のようだ。

＜解釈8＞特殊工事の作業員も、ある意味長距離トラックの運転手のようで、結構気楽そうですね。

＜夢9＞定食屋でかつ煮定食を完食した。店のテレビでは、アベックがヤクザにカツアゲされるドラマをやっていた。続いて何を思ったのかとんかつ定食も注文して、これも完食した。もうお腹がパンパンだ。テレビはそのアベックが誘拐される場面になっていた。

＜解釈9＞私個人は、肉料理がさほど好きなわけではないのです。

15、写真時代の絵画の在り方

最近では撮像素子がスマホに標準装備されていることもあって、万人写真家の時代である。こと事実の証明である限り写真は正確そのもので、しかもシャッター1つのパカチョンで手軽に写せてしまうのだ。最近のスマホには、「不要になった写真の削除機能」までついている程だ。

他方で歴史を振り返ってみると、写真術が定着してまだ高々150年、カラー写真に至っては40年ほどだ。そしてそれ以前は人物や風俗を知るには、画家の手による絵画が唯一の媒体であった。つまりつい最近に至るまで絵画には芸術という側面の他に事実の記録という側面があり、むしろ後者の方が重要だった程なのだ。

日露戦争くらいまでは戦争に従軍画家を連れて行った。今我々が過ぎ去った時代の例えばハプスブルク家とかメジチ家の人々や暮らしや風俗を知ることができるのも、一重に絵師と絵画のおかげである。日本に限っても浮世絵とか錦絵あるいは百人一

瞑想録(その22)

首かるた絵にも、こういう事実描写の役割があった。現に我々はこれらの絵画のおかげで、貴重で得難い情報を得ている。

実際100年前にたまたまアジアを回った画家の気まぐれなスケッチによって、我々は当時の未開民族の文明の詳細を知ることができる。南蛮図屏風や江戸図屏風があるから我々は、400年も昔の当時の様子を知ることができる。さらにシベリア抑留者の描いた絵画によって当時の厳しい自然や生活を知ることができる。これらの絵など特に、自分の画風を誇るために描かれたとはおよそ思えないと言う意味で、ほとんど写真なのだ。

もちろん絵画はその描く人の主観や手法の癖が入ってしまうので全くの正確ではないのだが、それは仕方ない。つまり言い換えれば芸術性と真実性は、同じ絵画の実に背反な要素なのである。今までも絵画に関する哲学議論の多くが、実はこの背反性に帰着できるものなのだ。

さて今私は、「つい最近まで視覚で真実を記録する媒体は絵画しかなかった」と述べた。これを言い換えると、写真が氾濫している現代においては、「絵画の内の真実を伝えるという使命は終わった」と言うことになりはしないだろうか。もはや戦争はあっても画家を連れて行くことはないだろう。

好きな画家が趣味で戦争画を描くのは勝手だ。だがそれはもはや真実の伝達と言う最低智の媒体ではなくて、単に趣味の世界の余剰智である。この意味で絵画の必要性が昔より狭くなっている。この狭い時代に絵画はどうやって生き延びれば良いのか。もしかしたら絵画のピンチあるいは終焉ではないのか。

いやそんなことはない。答えを言えばそれは簡単であって、今後はひたすら嘘を描けばよいのだ。嘘とはどういうことかと言うと、写真ではおよそ作り得ないほど非現実的な虚構を描くということだ。有名な例を挙げればピカソとかシャガールとかカンディンスキーのように景色では絶対にありえない心象とか、妖怪やアクロバットのように人体の構造上ありえない形状や体位について描く方向だ。

もっと言えば我々が否応なく住んでいるこの「4次元時空」と言う腐った常識をぶち破るような絵を描くのが、今後の方向になってくる。もしあなたに多少の冒険心と常識の押し付けを嫌う気持ちがあるのなら、この立体空間に飽き飽きして、外の宇宙を覗いてみたいと思うだろう。

以前にも指摘したが現代科学特にその基礎である数理科学は、①線形空間でありかつ、②等間隔の数字列であるという「超対称性」のおかげで、いろんな定理が出てきて一見きらびやかなのだ。だがその実「超対称性で予定された定理しか出てこない」という意味で、この超対称性は強度の制約にすぎない。

それは例えて言えば金の鎖だ。純金ほど輝いているかもしれないが、所詮は人を縛る鎖なのである。だから文学作品に典型的にみられるような心の襞とかが、数理科学や式で表現できるわけがない。この世の真実はねじ曲がっていき過ぎて、非対称もはるかに限度を超えているからだ。

言い換えれば今の数理科学は対称性のある事物しか表現できないという意味で、痒いところに手が届かない極めて不器用な表現手段なのだ。そして人類をこの鎖から解放放つことができる大天使、これこそが絵画なのである。つまり絵画は写真のおかげで居場所がなくなったのではなく、むしろ逆に本来業務に専念できる環境になったのだ。

これは素晴らしいミッションではないか。地球上に居ながらにして、永遠に行くことができる別宇宙を体験できるのだ。ここに現人類の次なる進歩のステップの位置を、私は見出す。ピカソやエッシャーを超える芸術、それは一体どんなもので誰が表現して誰が見出すのだろう。

そしてその更なる次のステップは、そういう外道なものすら表現できてしまうような、超数理科学の開発ではないか。ここまで行ったらもう写真に大きい顔はされない。不肖私も素人ながら、こういう作品を見出したいくて日々美術館巡りや博物館めぐりをしている。

16、少数民族はなぜ派手か

中国南部の苗族とかタイのモン族とかインドネシアのトラジャ族とか、アジアや南洋群島とかあるいはインディアンとか、見て気付くのは衣装が派手なことだ。赤、青、黄、黒等の鮮やかな色をふんだんに使って、コントラストの強い模様の衣裳を着ている。素朴にこれはなぜだろう。

なぜ素朴に不思議に思うか解説する。少数民族と言うことは大規模火器で領土を増やそうと言った技術とは無縁の、こと技術とか学問では豊富でない人たちが、農業も

瞑想録(その22)

食料生産もすべて原始的だろうに、なぜか衣装に限っては極めて高度な技術を持っている不思議さだ。

これは文明の初期についても似たことが言える。縄文土器、さすがに彩色はできなかったし厚手の作りではあるが、あの炎が舞い踊るような造形は美術的価値が極めて高い。それが弥生土器、須恵器、土師器と時が至るにしたがって、薄手にはなるが形状的には控えめになっていく。

技術ではなく欲望として派手にしたいという気持ちなら、なんとなく分かる。あの原始的アニミズムの、すべては山や海や大風等の神様から恩恵をもらい、また祈りで呪いを静める祭祀的社会においては、自分を大きく見せて悪魔を遠ざける、あるいは自分を大きく見せて敵を威嚇するのは、生存に直結する重要な行為だからだ。

だから色だけではない。インディアンの酋長たちは大きな羽飾りをつけているし、少数民族はこぞって刺青をするのも、自分をあるいは驚にあるいは鰐にと言うように、強いものへの一種のあやかりと言うか擬態をするためだ。そして派手な色使いもこの線上にあるということだろう。

だが不思議なのは染色技術の獲得過程である。染色と言えは最初に利用しようと思うのは植物だろう。緑などはこれで染められるかもしれない。黄色はウコンで出せるだろう。藍色も植物の藍から出す。橙には紅花が使える。だが草木染を見れば分かるように、草花から抽出できる色は大抵が中間色のパステルカラーであって、真っ赤とか真っ青とかは難しいように思う。

調べてみるとどうもこれらの色は鉱物から抽出しているようだ。たしかに草木は有機物だが、鉱物は金属イオンの色なので原色が出やすい。だが鉱物の多くが毒性もある。しかも鉄の精錬は知らないが鉱物からの色抽出法は知っていると言うのが、なんとなく現代的視点からは不思議に見える。

不思議と言えはそもそもこれらの原始的な民族が、なぜか機織り機だけは持っていて、①繊維を紡いでその上に、②布を織ると言う技術ができる。もちろん自動織機ではないにしても、機織り機と言うのはそれ自体が結構なからくりだ。あの技術があれば人工弓とかの強力武器も作れそうだが、実際は槍を持って駆け回っている。

さらに家だ。例えばインドネシア奥地の首狩り族ですら、家だけは昔の日本の田舎の農家のような、大風にも倒壊しない立派なものを建てている。これだけの建築技術が

瞑想録(その22)

あったら、やはり投石機とかあるいは砦とかを作れそうだし、さらには三角法を想到できてもよさそうなのに、そういう現象は見えない。

結局は「必要は発明の母」と言うことだろうか。まあ派手なのが少数民族でも熱帯から亜熱帯の食料に関しては困らない人たちなので、まじないさえやっていればあとは発明する必要がないと言うことかもしれない。彼らは彼らなりに、幸せで完結しているのだ。現代人と違って定時勤務と言うものはない。

せっかくだから衣装の話をもう少し続けると、布のデザインの仕方には織り、染め、縫い、編み等多くの技法があり、特に染めには捺染(印刷)、絞り(括って染め分ける)、描画(筆で描く)等の種々の技法があり、かつこれらの技術が1枚の布に組み合わせて使われているのだが、今見た少数民族は既にこれらの諸技術のほとんどを、自前で獲得している。

結局少数民族も人間である以上知恵はあって、その分岐点はやるかやらないか、あるいは必要と思うか思わないかという点にあるのだろう。典型的なのが例えばアメリカインディアンやチベット人に見られるように、いわゆる文明人と交流して銃とか石鹼とかの文明物を見ると、物々交換で得ようとする。

そのためには働くことも覚える。但しそれら文明の利器の仕組みを知ろうとかまして自分で作ろうなどと言う気はない。思うに文明人と交流する以前の少数民族は、情緒だけあって論理や情報は最低限なので、控えめとか抑えと言う発想もなく思いつき派手になるのではないか。

彼ら少数民族も最近は何々交換から次第に貨幣経済が始まって、個人所有という概念ができ、文字や理屈も覚えて文明が高度化していく。先の鮮やかな色彩の衣裳だって以前は先祖代々で着ていたものを、未知のものと交換できるとなると敢えて自前のものを売ろうとする。歌や踊りだって昨日までは豊作を祈って自主的にやっていたものを、今日からは金をもらって仕事としてやるようになる。

鉱物から色を発見したがそこまでおしまい。色を抽出できるほどには縄文時代よりも進歩していて、例えば日本の白鳳時代辺りか、これが現状の世界に山ほど数がある、少数民族の現状であろう。つまりこの点に人類の文化発展の一段落があると言うことだ。

私は個人的には、こういう気ままな人生や生活は決して嫌いではなく、むしろ素晴らしい

いとすら思う。

17、払いたくない人件費

人は誰でもできる限りお金は払いたくないものだが、私は特に人件費を払いたくない。もっとも売り物のどれをとっても自然からの産物である素材とか農産物の原材料費等を除けば、ほとんどすべてが結局は人件費に遡るので、話はややこしい。

加えて人が最低限度に生きていくためには、税金や年金や保険と言った天引き物の他に、衣食住にどうしても金がかかってしまう。ちょっと隣町に行くのにだって電車代やバス代がかかって、これらはどうやってもこれ以上減らせない限度額がある。

最近に山崎寿人さんと言う人の書いた、「年収100万円の豊かな節約生活術」という本を読んだ。厳密には、「年間支出を100万円以内で済ます方法」と言った内容だ。自宅あり、家族なし、保険類一切なし、車なし、旅行なし、料理は自前と言った条件で、たまたま今貯金が2千万円あり45歳なので、年金受給までのあと20年を「仕事をしないで貯金だけで生きつなぐ」という趣旨だ。実際に実行している。

私の場合は妻子がいるのでさすがにこう言うことはできないが、人件費を特に払いたくないそもその理由は、貯金が余りないと言う理由よりも、死ぬほど嫌な地獄の我慢をして時間を会社のドブに捨ててやっとなら私収入について、この地獄を超えるほどの天国的な買い物などおそないということだ。

そして中でも払いたくないのが、「自分が人件費で稼いだものがそのまま右から左に流れてしまうだけ」という意味で感情的にとっても許せない、見える人件費だ。具体的には出前とかウエイトレスとか仲居とか個人商店の売り子と言った、大した技量もないのにいわば存在するだけで時給をもらっていく人々だ。

もちろんピザの出前の兄ちゃんも引きこもりよりよっぽど偉いし、私と同じように時間も拘束されている。だが偉いと思うことと喜んで人件費を払うことは、全く別だ。私の嫌な思いがそのままに、ピザ配達のお兄ちゃんやウエイトレスのおばちゃんのウ○チになるかと思うと、悔しさのあまり涙が出てくる。

と言っても、私の勤め先がブラックな訳でも何でもない。いわば普通の会社で、同僚たちなどには、「この程度の仕事で済んで良かった」と思っている人たちも居るくらいだ。でも私としては、会社のドブに捨てる時間がいかに惜しい。仕事自体は多分に格好

瞑想録(その22)

をつけているだけだが、それでもこれだけの時間があつたら、必ず遥かに有意義に使える。それがそこらの兄ちゃんのウ○チだ。

私はこのブログで定期的に「昼飯シリーズ」をアップしているが、別にグルメ自慢をしているわけではない。むしろ逆で、「いかに上手く人件費の割合の少ないところを掘り出して食事をしたか」を自慢にしている。だから行先も区役所食堂とか大学食堂が多いし、割引券を利用した時はことさらに書き添える。自慢だからだ。

芸術系は全般に好きだが、舞台物の演劇とかコンサートとかには行かない。1席5千円とかしてその全部が丸まる人件費、それも嫌々やっているのなくて好きでやっている奴らの趣味への追い銭になる。もう発狂しそうなほど考えられないことだ。

最近は人工知能(AI)の進歩が著しくて、10年か20年以内に「現在の仕事の半分は無くなる」と言う。そして私が今挙げた様な単純業務、これらはほとんどがAIなどと言うまでもなく、今の技術で機械化できるものだ。ボタンを押してコインを入れれば注文品が自動で出てくるようにすれば済むだけのことだ。

良く田舎のおばさんで、人と知り合って世間話をするのが何よりも好きな人がいる。旅行に行っても景色よりも、そこで知り合った一期一会の人とのやり取りを土産話に自慢したりする。私はこの手の面倒な付き合いが大嫌いで一切不要なので、食堂無人化は大歓迎だ。

似たような例で、最近のネット販売には紹介コーナーに生産者が自分の写真を載せて、「私が作りました」などと親近感を狙っているサイトが多い。サイト運営者がそういう指導をしているとも聞く。だがこと私にはこれは逆効果で、「こんなおっさんに金をくれてやるのかよ」と、逆に萎えてしまう。

AIの進歩でなくなるのはむしろ、従来「知的職業」の側に分類されていた職業だ。例えば保険金のアジャスト業務などマニュアル1冊を頭に入れる必要があつたが、定型業務でもあるのもうすぐ無人化される。この傾向にあつて私が特に気になるのは、調剤薬局だ。

薬学部は10年くらい前から、就学年数が6年に延長になった。つまり大学に6年行かないとそしてそれに応じた授業料を支払わないと、薬剤師の資格を取れないのだ。だがあの調剤薬局の「袋詰め」と言う単純作業のために、これだけ長い修業期間が必要だとはおよそ思えない。

だが6年の授業料に見合った収入が保障されなければ、生徒が集まらないだろう。だからこの医療費総額が数十兆円にもなって財政破たんの元凶とされ、医療費削減のために在宅介護の推進などと迷惑な時代にあって、医療費をさらにかさ上げするだろう薬剤師技術料の大幅な増額は、在学期間延長の際にほぼ約束されたと言ってよい。

先日に行きつけの薬局のおばさんと話をしていたら、「客にどんなアドバイスをしたかをメモすることになっている」と、ポロツと言っていた。アドバイスと言ったってせいぜいが「薬は効いていますか」とか、最高でも医者と同じことを二重に聞かれて返事もしたくないほどなのだ。でも薬剤師協会は早晩、これらのメモを証拠の品として技術料アップを要求してくるだろう。

一言で言えば、たかが袋詰めに余分な追い銭をしてやる代わりに、ボケ爺さんや半身不随の親戚を我々が徹夜で世話をしろと言うことだ。こんなふざけたことがあるだろうか。こういう人件費はピザバイクの兄ちゃんをはるかに超えて、怒り心頭に払いたくない。

18、論理より自然性

「あの一、ちょっと話を聞いてもらえませんか?」「あ、いいです、間に合っています」。「どうして話を聞かないうちに、間に合っていると分かるのでしょうか?」

これは昔よく駅の前に立って勧誘活動を行っていたモルモン教宣教師と、通りがかりの平均的日本人の間で良くかわされた会話です。日本人は「胡散臭い奴の屁理屈に一々答えるのはむしろバカだ」などと心の中で思っていて、知り合うのすら避けてさっさと通り過ぎます。

でもこのモルモン教宣教師の話、論理としては完ぺきに真です。三段論法とか背理法と異なって「形式的に真」とまでは言えないのですが、標準的な意味で解釈すればこれは絶対真です。ではなぜ絶対真の論理が、現実には通用していないのでしょうか。

通用する場合ももちろん結構あります。私の場合は「読むべき小説をどう選ぶか」です。題名は結構なヒントですが、内容そのものと全然違うことも多いです。「コンビニ人間」、これは題名で内容をかなり推察できます。他方で「舟を編む」、これはベストセラーだそうですが、解説がないと私にとって面白いのかつまらないのか全く分かりません。

瞑想録(その22)

ここで同じ形で似た論理を作ってみましょう。「あの一、死ぬのって怖いですか?」「怖いですよ」「どうして死ぬ前から怖いと分かるのでしょうか」。全く同形式でやはり絶対真です。意味的絶対真としては、「忘れたと言うことは、一度は覚えたと言うことです」と言うものもあります。

論理には論理で返すのが科学的な態度でしょう。でも普通はこんな努力すらしません。白いシャツで黒いズボンとネクタイで厚い本をもって駅の前に立って無差別に話しかけてくる、このルックスと雰囲気だけで十分に怪しいわけです。つまりルックスと態度が論理のいかににかかわらず、小説の解説の役割をしているわけです。

そもそも現実の根本に返れば、人の寿命は有限ですから一々全部なんか聞いてもらえません。ですから冒頭のような論理無視の答え方になります。これは相手がモルモンの場合に限らず、人生の選択全てにおいてそうなのです。

論理学は学校でも習うので神聖な手続きと思われがちですが、実はそんなことはありません。また有用でもありません。単に返事が面倒なだけです。勝手に相手の土俵に嵌め込まれてしまうからです。まじめな人ほど一々まじめに返事をして返って絡まれますが、これはむしろバカ正直と言うべきでしょう。

もちろん雰囲気で判断することは絶対真ではありません。「内科肛門科医院」、普通ない組み合わせですが検索するとあります。もしかしたらその声かけは本当に善良な人が、当たり券を譲ってくれるのかもしれませんが。もしそうだとしたら、「間に合っています」は、チャンスを捨てる行為になります。でも人生というもの、この程度のリスクを踏んでも基本は「普通」と言う常識に基づきます。

「最近不漁なのは海の神が怒っておられるからだ、生贄を捧げよう」、これだって非科学的なだけで論理としては真です。文体を見てわかるとおりに構造が論理的にできています。ちゃんと人の知恵を使って因果関係を推論しています。お釈迦様も「結果には必ず原因がある」と因果応報の理を述べられました。ただ現代人が学校で習うことと違うだけです。

他方で不自然なことはたいてい裏があることも、人は気づいています。例えば「民進党が女性宮家と言っているけどおかしくないか」とか、「舛添知事が温泉ホテルで会議をしたと言っているが信じられないよね」と言った感じです。もちろん絶対真ではないので学問や裁判では弱いですが。

要するに以前も指摘しましたが、人の判断の基本は論理ではないのです。むしろ目の前の目標を達成するのに最もエレガントな選択肢を選ぶと言う意味での省エネルギーの法則、最小作用の原理を実践しているわけです。そのためには可能性の低い選択肢は、論理真であっても捨てます。

ここで単に常識を論理に優先させるのなら「亀の甲より年の劫」と言うか、地あたまの良い人より勘の良い人や場数を踏んだ人の方が優遇される社会になるはずですが、そして「天才バカ」と言う言葉もあるように世の中にはそういう面もあるのですが、多くの場合地あたまの良い人がトータル的には勝利します。

それは地あたまの良い人の方が、可能な選択肢についてより広く多次元で見出せるからです。加えてその広い選択肢の中から、よりエレガントな解を的確に選び出せるからです。例えば織田信長が本当にうつけだしたら、「桶狭間であれば今川を討てる」と言う選択肢に気付かなかったことでしょう。

借りた本を明日返さないといけない、その条件下で「同じ本を買う」選択肢に決めた。まずこれ自体が知恵です。加えてその瞬間に状況が変わって、「今日中にその本を読み通さないといけない」という義務が消滅しました。世の中の人には意外なほどに、この状況変化に機敏に気付かないものです。こういう論理が直ちに閃く人ほど、論理も含めて地あたまが良いと言えるでしょう。

そしてやはり以前にも指摘したことです、こういう即座な頭の切り替えは、細部はともかくマクロな目標について、その方向性をどれだけ深く認識できているかによっても左右されます。ここが自然知能と人工知能の分かれ目です。人工知能小説は各行ごとにはつながっているのに初めと終わりではまるで話が違ってきます。全体観を持ってないからです。

人の脳を考えるとこの常識と言うものは極めて重要なカギになると思っています。

19、絵画と夢が教える本当

下の絵はキュービズムの巨匠のパブロ・ピカソの代表作の、「アビニョンの娘たち」です：



題目が「たち」なので複数の人物がモデルなのかもしれませんが、絵からは「1人の女性」と見た方が自然です。それにしても変わった絵です。女性の顔であることは分かるのですが、両目は離れようとしているし鼻は何か手の指が嵌った箱のようになっています。

ピカソは絵が平面であるのが気に入らなくて、言わばこの制限を打ち破ろうとしてこれら一連の絵を描きました。それでキュービズム(立体派)と呼ばれているわけですが、これは単に「縦×横」にもう1次元「高さ」を加えただけ、あるいは展開図的に実物を説明しようとしただけでしょうか。

瞑想録(その22)

もしそうなら彫刻にするとか設計図にするとかすれば済んだ話で、そんなことはピカソよりも500年も前にダビンチが既にやっています。ピカソは単に平面に一味追加しようとしたのではなくて、平面、立体あるいは4次元時空に限らず、そういう「のっぺりした行儀のよい空間」をぶち壊したかったのだと思います。

実際に彼の絵や、たまたまあなたの横にいる人物を見てください。目と目が実は離れたがっていることに気づきませんか？逆に鼻が指を呼び込んでいることに気づきませんか？顔全体の個々の部品が行儀よく座しているどころか喧嘩しあってひきつっている、あるいは隆起や陥没したがっているとは見えないでしょうか？

ピカソは実は単に「本当」を描きたかったのです。子供に絵を描かせると個々の部品をバラバラに描きます。部品は理解してもそれら全体が「縦、横、高さ」の距離のある空間に整然と収まっているという認識がないからです。いわゆる未開地の土人に絵を描かせても、多分にこうでしょう。クロマニヨン人もこうでした。

自分の成長過程をよく思い出してください。生まれついた時から「世界は3次元だ」と言う認識はあったでしょうか。これはむしろ学校で教わるか、あるいは歩くとか物を取ると言った空間的な経験から、後天的に理性で学習した事項ではないでしょうか。

まあ外部の物理空間は物理法則が支配していますから、こういう理解に至らざるを得ないでしょう。でもそれを見る心象や心の働きはむしろ、「目が喧嘩し合っている」とかあるいは「鼻と口が曲がって合体しようとしている」と言うのが本当のありようと、少し素心に返って瞑想すると気づくようになります。

ピカソは静物画もたくさん描いていますが、そこで描かれた動かないはずの静物は、あるいはかごの中のミカンが互いにはじけ飛んでかごから出ようともがいており、またあるいはワイングラスが自ら壁に当たって壊れようとしています。そして実はこちらの方が本当で、おとなしい立体空間の方が嘘です。

ピカソとほぼ同時代の画家にミロが居ます。下の絵は彼の「アルルカンのカーニバル」という題の絵です。



この絵のどこがアルルカンで、どこがカーニバルなのでしょう。ミロはおそらく、本当のカーニバルを見ていたのでしょう。でもミロの頭は物理法則を記述するためにあるわけではないので、カーニバルをある程度眺めているうちにその本質を描いたら、この絵になったわけです。

ミロの場合も別に奇をてらうとか現代絵画を描こうとしたわけではないです。カーニバルという物語を追っているうちに彼が理解したイベントとは、この絵のような形をしていたわけです。その意味で物理世界よりもこちらの方が、遥かに真実です。

これらの偉大な画家が教えてくれることは、①現在われわれが学校で習う外界世界が世の中の真実のすべてだと言う教え込みが実は嘘で、②本当の我々内外の世界はこれらの絵のような方こそ遥かに座りが良くてかつ偽善もない。つまり本当だと言うことです。

似た例に夢があります。人は寝るとしばしば夢を見ます。夢で見るイメージは、形も立体系でもスクリーンでもなければ、脈絡も非論理的です。でも睡眠と言う人として後天的な人工智を忘れた時点で見えるイメージ、こちらの方が本当でなくてどうして我々は人であると言えるのでしょうか。

瞑想録(その22)

子供、夢、原始人、更にはぼけ老人、こういう人たちの見る世界と宇宙観の方が自然で本物です。ただ自然過ぎて社会の約束事がないので、社会生活には向きません。ぼけ老人などその典型例です。でも行儀が一見良いことと人として本来であることは、全く別でしょう。論理も典型的に人工です。

本当の世界はこのような、斥力と引力が動的に交差し合ったところのパッチワークなのです。3次元空間とか立体描像の行儀の良さは、キリスト教的一神教と言う一宗教の、「神の摂理」そのものの顕現に過ぎません。ですからなおのこと排他的に人工的なのです。

でもこの摂理を、つまりキリスト教を否定したピカソやミロが、ガリレオっと異なって宗教裁判にかけられるどころかかえって生前に評価されたのは、ただただ驚きですね。

20、もったいないということ

動画作成及び閲覧用に、フラッシュというプラグインソフトがある。非常に多用されて、10年くらい前は動画全体の半分以上がフラッシュ(ショックウェーブ)によるものだったほどだ。このフラッシュのサポートを、配信元のアドビーが「終了する」と最近宣言した。

理由は今の時代にはHTMLに動画作成機能が組み込まれていて、わざわざプラグインソフトを利用する人が減ったためだと説明している。要するに技術革新に伴う時代の流れによる発展的解消と言う訳だ。今の所はブラウザで許可すればフラッシュ動画は見られる、つまりひと手間は必要だが見られる状態だが、いずれ閲覧不可能になるだろう。

もう一つ理由があって今主流のスマホ、OSがマックだろうがアンドロイドだろうが、フラッシュ動画は既にサポートされていない。相性が悪いのだ。だからフラッシュの終了は例えば、今のパソコンにはもはやフロッピーディスクドライブは付いていないようなものだ。

まあ技術革新という大きな良い流れの副産物的効果だから、トータルとしては喜ばしいことなのだろう。でも今までに作られた膨大なフラッシュの作品群、中には暇つぶしの作品も多いだろうが、他方でユーチューブにより数百万回も閲覧された作品もある。あれらが全部没になってしまうのは、それらに費やされた時間や能力やアイデアを考えると、ちょっともったいない気もする。

瞑想録(その22)

一言断っておくとユーチューブでは今でも、フラッシュ動画を手間なく閲覧できる。ただこれはユーチューブの方が手間を引き受けてフラッシュ動画も再生可能にしているためであって、いわばサービスのおかげだ。だが時代が変わってフラッシュ動画が減ってしまうと、この手のサービスもなくなるだろう。

もちろん著作物はその後の作品の参考にもなるものだから、そう言う意味では全く無駄になると言うよりは間接的に人類文化に貢献し終えたと言うことだろう。それにしてもこのIT文化が年々進歩する時代に、このように使い捨てられていくソフトや作品はますます増えることだろう。

「どんな作品も10年後には消えている」時代が間近でも、おかしくない。ビデオやフロッピーディスクがDVDに代わって、売れない映画や不要なデータは一切自然消滅した。そもそもこのヤフーブログだって、10年後には供用停止か非互換化して読めなくなっているかもしれないのだ。

もちろん歴史を振り返ると、似たような「もったいない」は昔にもあった。典型的な例を挙げれば秀吉が作った聚楽第と信長が作った安土城、いずれも当時の最高技術と贅を尽くしたものであったが、天下人の気まぐれで数年後には破却されている。本願寺顕如が逃げる際にも膨大な伽藍に火をつけて出て行っただが、これももったいない。

ある意味ではこれらは、存在が文献に残されているだけまだましだ。南洋諸島の島々を命がけで渡って広がっていた人々の歴史、その勇氣と苦勞はたまたま記録に残ったモーセの出エジプトよりもはるかに偉大だった。だが彼らの決断や苦難の実態やノウハウを、我々はもはや知ることすらできない。これこそ究極の「もったいない」だ。

もっともこれらもったいないが、単に「もったいない」で済むだけなら話は簡単だ。つまりしばしば「単にもったいない」では済まない、話が入り組んだ場合がある。例えば今田んぼや畑になっているところ、これらは開墾される前は草地や森林だった。生産性という観点からは開墾された後の方が良いに決まっているが、人によっては「それよりもかつての良い武蔵野を見たい」と思う人も居ることだろう。

このように創造はしばしば破壊も伴うものなのだ。近所に小机城と言う昔の山城があるが、このあたりに高速道路を作る際に、道をあえて曲げると事故が増えるという配慮から、城跡の3分の1ほどは削られて今はない。港北ニュータウンの造成の際も、縄文時代の環濠遺跡の一部が削られている。この点をかつて学芸員と話したことがあるが、学芸員すら「仕方ない」という見解だった。

こういう見方をすると冒頭に挙げたフラッシュの規格の終了も、「不要な作品が取捨選択されて後の煩雑な整理作業を省く丁度良い篩(ふるい)である」という見方も出来てしまう。ここに情報価値と言うものの、単純には決められない難しさがある。グランマモースの絵画も運が悪ければ捨てられていたし、ゴッホの絵は良い偶然が重なって残り、今はべらぼうな値段がする。

基本的には「無くなることはすべてもったいない」のだ。でも我々は全部を取っておくと言うことが、原理的にできない。物が膨大になりすぎて管理できないのだ。ちょっとしたメモあるいは単位を取るためだけの作文、これらも後世に価値を見出される可能性が全くないとは言えないが、しかし平気で捨てないと事が進まない。

今の時代はもったいないよりもむしろ、断捨離の方が流行っている。物にあふれている時代だからでもあろう。「捨てると残す」、この日常的な単純作業にも考えてみると深い意味があることに気付くのだ。

21、歴史となり切り

私はそもそも好奇心が強いこともあって、全くの専門外であるが歴史物が好きだ。そして色んな時代と地方の歴史本を面白く読むのだが、どうしても興味がわからないのが「大覚寺統と持明院統の対立」だ。

大化の改新も満州国もバウ戦争もセポイの乱も、たいていの歴史的事実に興味がわくのに、なぜかこの対立事象にだけは興味が出てこない。この対立がひいては室町時代初期の南北朝と言う皇室分裂の一大事を引き起こしたのだから、重要なことは否定しない。入試にも出るから、学生の時はずっと丸暗記した。

一般に「歴史は記憶物だ」と言われる。特に年号などは何の必然性も論理もないから、「良い国作ろう・鎌倉幕府」とか「一味散々北条氏」などと語呂合わせで丸暗記するしかない。そしてもし歴史全部が単純に丸暗記しかないならば、興味などおよそ沸かないだろう。

この意味では冒頭の二統の対立に興味がわからない方が普通であって、興味がわく歴史部分には何らかの付加価値があるということになる。そこでこの付加価値とは何かを瞑想してみた。これもこのブログのテーマである「素朴な疑問と意外な気づき」の1つであるからだ。

そして分かったことは、「歴史の面白い部分には必ず流れがある」と言うことである。歴史は単なる記憶の巨大なバケモノではなくて、歴史の面白いところには流れや立体感がある。もっと言えば物語があるのだ。そしてこれが追っていても面白いし、現代の自分の生き方の教訓にもなる。生きた知識足りうるのだ。

もっと言えば究極的に、自分がその歴史の主役なり見聞者になり切って、いわば感情移入することができる。実にこの「なりきり」こそが、歴史のだいご味なのだ。義経記を読む時には自分は義経になり切っており、三国志を読むときには自分が諸葛孔明になり切っているのだ。

ところが大覚寺統と持明院統の場合は、話が抽象的でヒーローが居ないせいかもしれないが、なりきれ余剰が全くないのだ。これではまるっきり他人事であって、興味がわくわけがない。無機質すぎるのだ。現代に生きる自分への教訓もない。

結論すれば歴史のみならず、国語や社会と言った人文系の分野はいずれも、その本質は物語性にある。「関係理解と立体的な想像力が重要だ」という意味では理系と違わないが、大きな違いはその関係が論理と言うよりも人情や状況であって、したがってワンパターンでなく妙味がある点だ。この妙味が好きな人は、文系を選ぶ。

ところでさらに遡って、歴史に物語があるのはどうしてだろうか。残念ながら文系の人はこういう「遡り」を教育されないが、私は理系出身なので根本に遡るように教育されている。理系と違って文系諸分野は常に遡れるとは限らないが、とりあえず瞑想してみた。

そして思うにこれは、歴史が「時系列上の淡々とした事実の平板な羅列」ではないからだ。以前にも指摘したが「単純時系列」という意味では、織田信長ほどの大波乱の人でも、その人生時間の9割が凡庸極まる時間の垂れ流しだ。「飯を食って糞を出して風呂に入って寝る」、この繰り返しだ。

だから仮にタイムマシンができて昔の有名人をリアルに観察できたとしても、その人を「早送り」せずに時間を共にしては、事件や発見などはほとんどない。この部分について何らかの理由で、選者の価値観と言った偏りは生ずるものの、事件の抽出があるから歴史になり物語になる。

瞑想録(その22)

その抽出は具体的には、今に伝わった文書なり遺跡の発掘結果に頼ると言う形になるが、そしてどれが残ってどれが消え去るかは多分に偶然の作用なのだが、その抽出がなければ歴史は無意味であり、抽出があるから物語としても成立するわけだ。

この辺は歴史に限らず、地理だろうが哲学だろうが、あるいはあらゆる文学に共通である。文学が絵のように具体的でないのに何らかの感情を想起出来て芸術足りうるその肝は、「重要な事項のみを記述している」という選択性に立脚している。

こうして偶然や選者の趣味がドロドロにまじりあった物語だが、学問的手続きと呼ばれる「人工的な客観性」にこだわらなければ、人間としての「合理的な推測」をしたところで、何の問題もないはずだ。ただ最低限、きっかけは時系列でなく事件ごとでなければ歴史を学ぶ価値はない。

まあその意味で大覚寺統と持明院統も情報集約はされているのだが、ある意味理系に例えればファンデルワールス力のようなもので、雑多な要因のドングリの背比べで山がなく、なり切れるヒーローも居ない。これが面白くない理由であると分かった次第である。

22、文明と未開の分岐点

世界中を見渡すと文明国もあれば未開民族も居るが、発展途上国はあっても「文明と未開の間」と言う存在は見当たらない。要するに世界は少なくとも数的には基本的に未開であって、例外的に文明国が十数か所あると言う状態だ。

しかも「文明国が数十か所」と言っても、ルーツは1つだ。現時点では北米と西欧が文明エリアの中心だが、最初に現代文明と言う状態に目覚めたのはおそらくイタリア辺りだろう。ではなぜイタリアで、かつどんなきっかけで目覚めたのか。

一つ言えるのは「努力が報われる」ところの「ほぼ温帯域」にあることだ。だが理由がこれだけなら、高度な航海術を持って広いエリアを征服しまくったバイキングの方が、先に文明国になっていてもおかしくない。あるいは高度の天文術を持ったマヤ文明か。

そもそも発端の国がイタリアかどうかは別として、現代文明と言う総合的な態様はその辺の1エリアで起こっている。だから文明と未開を分けたきっかけも現代文明の科学技術の華やかさに反して、単一の弾みと言うかきっかけだっただろう。言い換えると

瞑想録(その22)

その単一のきっかけがなかったら、人類は今でも全部未開民族の割拠状態だったのだ。

今科学技術を「華やかだ」と言ったが、実は精神においてはわずか一色である。それは力や作用を「すごい」とか「美しい」と思わず、「これを利用して何かを作ってやれ」と思う逆転の発想である。ここで逆転と言ったのは、「すごい」や「美しい」の方が人として自然な感受だからである。

そしてこの逆転の発想を生かすには注目した力や作用について、「その根本は何だろう」と深めて汎用化させる発想が必要である。特にその「根本」について、裸眼では見えないミクロを見ると言う姿勢が重要である。「マクロには異なるものもミクロには同一である」と言うことは、これに気付けば山ほどあるからだ。

この、根本をミクロに見出してさらに利用しようと言う根本態度、これが文明と未開の別れ道で、この逆転の思想が発生した時点が現代文明の発生時点だ。ひとたびこの思考回路が認定されれば、あとの華やかさは機械だろうが電磁気だろうが化学だろうが核融合であろうが、この態度の単なる応用に過ぎない。つまり華々しくもなんともない。

このような「利用して作ろう」という逆転発想のおかげで、いわゆる文明国は強力な動力や武器や品種改良を行った。自ら富むとともに未開国へ出かけて行って武力で現地人たちを強引に植民地化し、「国がなかったところを支配したから俺のものだ」などと言う我田引水な理屈で世界の大半を手中に収めた。「力さえあれば大義など後からついてくる」、国際法の原理は現在でもこうなっている。クリミアだろうが北方領土だろうが、取った方が勝ちだ。

ちなみに、未開人のIQが文明人のそれと比べて劣っているということはない。未開人は未開人なりに、身近にあるものをうまく活用する術に極めて長けていた。そういう直感と勇気で、例えばポリネシア人はモーゼなど足元にも及ばない大航海をやったのである。ただ未開人は環境に順であって、「環境を壊そう」などと言う野蛮な逆転発想がなかっただけなのだ。

その「逆転こそが真」あるいは「倒錯が利益」と言う発想、物理学や化学では今でもそうだが、これが定着したのはそのきっかけとして「常識が愚かにされる」と言う象徴的な出来事が指摘できる。思うにそれは「地球は丸くてしかも動く」と言う気付きの認定ではなかったか。これは神をも恐れぬ行為だ。

地球ほど硬くて平たく見えるものが実は丸くてかつ動いている、これは一般に「コペルニクスの転回」と呼ばれる気付きである。これほど天地がひっくり返る発見であるならばたしかに、「これまでの常識の逆をやるのが実は生産的である」と言う「捻じれた図式」が庶民の脳裏にまで染み込むだろう。文明の本質とはこの捻じれた図式である。

一旦捻じれた後の、今に至るまでの科学技術や医療の発展は、言わばもう当たり前で約束されたことである。言い換えれば科学者とか研究職はインテリのエリートコースのように思われているが、もはやすでに何世紀も前から、単に「科学技術」と言う名の手続きを忠実に履行するだけの小役人に過ぎない。

それではさらに遡って、なぜイタリア辺りでこのような「狂った気づき」が発生し得たのであろうか。これにはやはりキリスト教の「貢献」があるだろう。現在の文明国がほぼ全部キリスト教圏であるのに端的に示されているが、キリスト教の特に組織神学と言う非生産的な屁理屈の捏ね回しは、科学的思考法の実にプロトタイプである。

但しこれは、キリスト教が宗教として優れていることを意味しない。むしろ劣っているのだ。キリスト教は「大切なのは悟りではなく救いです」などと称して、自ら感得することつまり主観を禁じて無意味な形式論理を奨励した。加えておまじないも占いも禁止して、人から自然さを奪った。ほとんど行儀作法程度の「宗教」だ。

その結果人々は感情や感動を、素直に表現することも出来なければ未知の偉大な存在に帰属させることも出来なくなった。つまり感動や気付きを「すごい」とか「美しい」で済ますことができなくなって、理屈に走る道しかなかった。その成果の第1号が、「地球は丸くてかつ動く」だったのだ。これに「火薬を大砲にしたり」「爆発を動力にしたり」する工夫が素直に続いていく。

こう言った「馬鹿の力任せ」を得た代わりに文明人は、直感や素心や耐性をなくした。例えば映画の「県庁の星」では、統計結果の数字を振り回す県職員にパートのおばさんが「客を観察しなさいよ、人は売り場を2周するの、1回目は様子見で2回目に買うの、知っていた？」と問う。

このように文明人の歴史は、武力と長寿の代償に直観力とマクロ観察を捨てた歴史である。今人工知能(AI)が発達しつつあるが、ここに入れるべきルールは統計や数字ではなく、むしろ未開の酋長たちの「真の生の知恵」ではないだろうか。人類にとって未開ではなく文明の方があだ花である。

23、意味理解の境目

日々の意味の理解を人は論理よりもはるかに経験に頼っていることは、先に記しました。但し経験と言ってもここは事前に経験したことの単なる当てはめや連想に限られるような狭いものではなくて、これらの複数の組み合わせや場合によっては突然の閃きと言う形もあります。そしてこれが人の脳の優れた所で、閃きがないならそれは高々人工知能(AI)です。

ここでやはり日常を見ますと、「日本語としては通っても意味が取れない」場合がしばしばあります。つまり経験の広い意味においてすら、納得あるいは共感できないのです。こういう例は、外国人とのコミュニケーションで典型的に現れます。

例えば日本では電車を乗り換えなくても乗り入れていれば、運営会社が代わるだけで再度基本料金を取られます。でもこのことを外人に説明しても、英語としては分かるものの内容をなかなか納得してもらえません。自国にそういうシステムがないからです。

また注意しても外人は、タクシーに乗る時にすぐに運転手と値引き交渉を始めます。それが日本以外の外国の常識だからです。このように言葉は通じても意味が通じない場合は結構多いのですが、ここで通じるか否かの「理解の境目」はどの辺にあるのでしょうか。

先日私は「オケ老人」と言う映画を見ました。中盤を過ぎたところで突然に、「天気が変わり雷雨になって劇場が停電する」と言う場面が入ります。それまで天気の話など全くなかったのですが。こういう展開は客観的にはいかにもご都合主義で唐突なのですが、私はなぜかそこで違和感を持たなくて、そのまま映画を最後まで見続けました。

映画は、「コンマスが機転を利かせてライトペンで指揮をして演奏は大成功する」と言う落ちで終わりました。振り返っても、唐突ではありましたが特段の違和感を持ちませんでした。他方で漫画の「のらくろ」で暑い日に連隊長が、「こういう日は精神だらけにしてやる」と言う場面がありました。

そしてこの場面展開は「暑い日の精神注入」であり、これは軍隊では当然だろうと思われるところ、なぜか私はこの部分で納得できずに躓きました。事態の展開のスムーズさではこちらの方がオケ老人の場合より繋がりが良いと思うのですが、なぜかです。

瞑想録(その22)

そして良く読み返してみると連隊長は、「こういう日は精神もだらけるようになる」と言っていたのです。

つまり結果的には私はうっかりの読み違いに、勘良く気付いた形になっています。でもこの「気づき」は、オケ老人の場合と順序が逆でしょう。そこで今日の瞑想ですが、素朴にどこに原因があってこの「逆順序」が出てきたのでしょうか。むしろこの場面で突然に「連隊長が裸踊りを始める」方が、まだ自然だとでも言うのでしょうか。

つらつら思うに、小説でご都合主義的に伏線なく場面転換をするのは、上手いか下手かは別にして、まああることです。小説をはじめ文章と言うものは要点を拾って繋げる仕事ですから、「突然」より前の状況を取るに足らなければ文章としては現れません。結局「唐突は文章には必然的である」と言うことになります。

こういう文章上の体験を、人は通常持っています。以上をまとめると、唐突でなかったのに意味が通じなかった「のらくろ」の方が例外的だったということになります。強いて言えば「精神だらけ」と言う言い方が、意味は分かるにしても通常は「精神の塊」などと言う言い方をするのであって、あまり慣用的でないという面はありますか。

この辺の意味が通るか否かは微妙なところで、多分に人や状況によって異なるところでしょう。そして私の場合は、経験を広く解釈しても「精神だらけ」を納得できるだけの応用力が、幸いにしてなかったということでしょう。応用力の強い人なら、もっと先まで読み進んでから「異変」に気づいたことかもしれません。

結局今回の逆順序は極めて個人的かつ状況依存であり、だからこそ一般に、「理解と不理解の境界はこの辺にある」と言う結論になります。つまり、「順序が逆転する辺りが境目だ」、あるいは「境目ではしばしば順序が逆転する」と言う法則があるということです。

もう少し例を挙げてみましょう。私は村上春樹さんの小説のどこが面白いのか全く理解できません。何十か国語にも訳されてノーベル文学賞の呼び声も高い程ですから、広く多くの人々に理解され愛読されているはずなのです。でも私にとってはあたかも、何の見どころもない単なる平家続きの住宅街をひたすら歩き続けている感じです。

日本語としては分かるのですが、どこが面白くてどこで盛り上がるのか全く理解できません。試しに後ろから読んでみましたが、やはり分かりませんでした。そもそも最後の

瞑想録(その22)

ページに「そこで終わりだ」という感覚すら持てませんでした。まあそう言う「際どい」ところを描いているから秀作なのでしょう。

別の例を挙げます。契約した保険を中途解約する状況です。「どうして解約されるのでしょうか」「ちょっとパンが食べなくなったもので」。この応答を理解できる人は居ないでしょう。実はことさらにそういう、めちゃくちゃな例を作ってみたのです。冗談を言う場面でもないですし、どう広く解釈してもこのような状況の理解を助ける経験群などありません。

さらに別の例です。「あなたはなぜ生きているのですか」「まだ死んでいないからでしょう」。このやり取りも理解が難しい。言っていることは絶対真なのですが、情報や感情が何もないところが逆に通常の理解を超えています。むしろ逆に「この人は明日死ぬ気ではないか」と、変に勘ぐってしまう程です。

最後の例ですが、今の節季では立春は真冬に來ます。つまり節季が本当の季節より早い仕組みになっています。これを「来る季節の先取りができて良い」などと、ことさらに講釈する先生がいます。そしてこういう先生に限って逆に節季が遅いと、「過ぎた季節の総括ができて良い」などと、これまた屁理屈で合理化します。

こういう人の頭の構造も理解できないし、する必要もありません。こういう人にはむしろ、「春分と秋分は休日で夏至と冬至は休日でない理由」を尋ねてみると良いです。これまたいかにももっともらしいような珍妙な理屈が返ってくることでしょ。

とすることで本日は、理解と不理解の境目について瞑想してみました。

24、真実のありか

大きな真実は既成の縦割り分野の中ではなくて、その間というか隙間にある。これは私がこれまでの人生で得た最大の法則である。

法学とか経済学とかあるいは機械工学とか衛生学とか、そう言った既成の分野に収まってしまうかつ成果を投稿する雑誌の選択にも困らない。そう言う研究はすでにレールが引かれていて成果が約束されているので、ことさらに力まなくても誰かがやるだろう。その意味でそれらは小さな真実だ。

瞑想録(その22)

本当に革新的な思い付きはこれらにまたがって、あるいはこれらの隙間と思われる一見ニッチなところにあるのだ。そういう所には迄レールは引かれていないし、思いついても評価してくれる人も居ないが、本当のトップレーサーは孤独かもしれないがこういうところを攻めている。

過去にも図らずもパイオニアになっており、しかもそれと気づかずにむしろ大回りして損をしたと思いながら寿命を終わったが、今日的観点からは極めて貴重な機会を経験したと言う種類の人が結構居る。こういう分野の方が遥かにスリリングだ。

例えば江戸時代初期に渤海湾に漂流した北前船の乗組員たちは、命からがらやっと帰国して、しかも鎖国の建前から生涯軟禁状態にあった。韃靼漂流記である。だが実は彼らは清と明の王朝交代に係る勢力争いを目の当たりにすると言う、極めて貴重な経験をしてきている。やはり漂流民の大黒屋光太夫やジョン万次郎も同様だ。

100年前に自ら予備役に回って密偵になった石光真清は生涯、「自分は人生の最初で選択を誤った」とぼやいていた。だが彼が見聞きした初期の満州やロシア革命の現場はスリルに満ちていて、彼の日記は読者をうならせる。

これらはいずれも彼らが先例のないパイオニアだったからすごいのであって、予定通りの人生あるいはすでに分類された人生だったら、寿命が来たら単に「はいさようなら」だっただろう。良い子だったし人畜無害だったかもしれないが、チャンスに遭遇しなかったという意味でツキのない人生である。

さてこの「真実はニッチに見えるところにある」と言う究極の法則、これは私の瞑想の結果としてこうして日々綴っているこのブログの編集方針でもある。特に記事のジャンル分類は記事の内容いかににかかわらず、全部「宗教」に入れてある。

もしこれを「科学」とか「生活」等にいちいち切り分けてしまうと、無意識的に記事内容をその分類に適合させようと恰好をつけてしまうだろう。そしてその時に切り捨てた部分にこそしばしば、最重要な人類未踏の気づきがあるのだ。

なおここで統一の単一分類を他の項目でなくあえて「宗教」としたのは、歌学も含めてすべてのことに「絶対正しい」はないという信念に依っている。究極的には個人責任で、「信じるか否か」の問題だと思えるからだ。学校での教えに反して根拠文献とか証明とかも、単に信じる根拠の1つに過ぎない。

瞑想録(その22)

さてさっきから繰り返している「真実はニッチにある」だが、この信念は諜報学の世界の権威で佐藤優さんの恩師でもあるエフライム・ハレヴィー氏の職業人生訓である「真実はしばしば細部にある」と、通じると言うかかなり重なっている。

つまり私は知の世界において実はまだ巧妙に隠されているものを、一種の諜報的態度によって掘り出そうともがいているとも言える。このように解説してみるとハレヴィー氏の人生訓が、「人の裏ばかり見ているせいで素直でなくなった悲しい癖」ではなくて、むしろ敵に打ち勝つ必勝法であると見えてくる。

もちろん、「そこに本質があると言うことは、実はそこが細部ではなくて太い部分だったということではないか」と反論することもできる。だがこれはあくまでも結果論である。ニッチも重なると常識化して太くなるが、その太くなった後にもあえて「新しいニッチ」を狙うべきなのである。

諜報活動は正の通報を真に受けるだけでなく、むしろちょっとした付けたしのひと言や報告者の態度にまで気を配って地あたまを働かせて究極の真実を掘り出す仕事だ。そうするとニッチなところが輝いてきて、場合によっては物を見る常識が全く変わってくるということなのだ。

私も日々このような心構えで瞑想をしている。そしてこのような心構えに照らして一番不潔な行為が、科学技術をやれとか良い社員になれと言った、「死んで終わった態度」の押し付けなのだ。振り返ってみると私はどこの大学の学部だろうがどこの会社の部署だろうが、役に立たなかったし死ぬほど嫌だった。だがこう振り返ってみると意外と、「単なるわがままだったわけではない」と見えてくる。

2017. 10. 21